



# 中国の社会主義 文化大革命

(第一集)

北 京 外 文 出 版 社

# 中国の社会主義文化大革命

(第一集)

外文出版社

北京

## 目次

- 毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ  
社会主義の文化大革命に積極的に参加しよう……………『解放軍報』社説（一九六六年四月一八日）…5
- 絶対に階級闘争を忘れてはならない……………『解放軍報』社説（一九六六年五月四日）…27
- へ三家村を評す  
——『燕山夜話』と『三家村ノート』の反動的本質……………姚文元…37

## 毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ

### 社会主義の文化大革命に積極的に参加しよう

『解放軍報』社説

(一九六六年四月一八日)

毛主席は、社会主義社会にもなお階級と階級闘争が存在する、とわれわれに教えている。毛主席は、わが国における「プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリアートとブルジョアジーとのイデオロギー面における階級闘争は、なお長期にわたる、曲がりくねったものであって、時にはひじょうにはげしくさえなるものである」とのべている。文化戦線でプロレタリア思想を興しブルジョア思想を滅ぼすたたいは、プロレタリアートとブルジョアジー、社会主義と資本主義というこの二つの階級、二つの道、二つのイデオロギーの階級闘争の重要な側面である。プロレタリアートは自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとするし、ブルジョアジーも自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとする。社会主義の文化は、労働者、農民、兵士に奉仕し、プロレタリアートの政治に奉仕し、社会主義制度の強化、発展と共産主義への逐次的移行に奉仕すべきものである。ブルジョアジーと修正主義の文化は、ブルジョアジーに奉仕し、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子に奉仕し、資本主義復活のために道をきりひろくものであ

る。文化という陣地は、もしプロレタリアードが占領しなければ、ブルジョアジーがかならず占領する。これほどの階級闘争である。わが国のブルジョアジーの残存勢力はまだ比較的大きく、ブルジョア知識人がまだ比較的によく、ブルジョア思想の影響がまだ比較的につよいから、またかれらがわれわれとたたかう方法がますます陰險狡猾になり、ますます曲がりくねった表立ないものになつてゐるため、もし、すこしでも注意をおこたり、すこしでも気をゆるめるなら、われわれは、それをたやすく見ぬくことができなくなり、ブルジョアジーの精衣砲弾にあたり、ついにはわれわれの陣地さえ失うことになるであらう。この面で、社会主義と資本主義のどちらがどちらに勝つかという問題は、まだ解決されてはいない。たたかいは避けられず、下手をすれば修正主義があたまをもたげることにならう。

わが人民解放軍は、中国共産党と毛主席が創設し指導してゐる人民の軍隊であつて、党と人民のもつとも忠実な道具であり、プロレタリアード独裁の重要な支柱である。人民解放軍は、プロレタリア革命の事業のなかで一貫して重要な役割をはたしているが、社会主義の文化大革命のなかでも重要な役割をはたすべきである。われわれは、イデオロギーの領域における階級闘争の情勢をいっそうよく見きわめ、全国人民とともに、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、確固としてゆるぎなく社会主義の文化大革命をやりとげ、(部隊の文学・芸術活動が政治先行、人間の革命化促進の面で大きな力を発揮するようにしなければならない)。

### 文化戦線にはすどい階級闘争が存在している

ここ一六年らしい、文化戦線にはすどい階級闘争が存在している。

わが国の革命の二つの段階、つまり新民主主義の段階と社会主義の段階をつうじて、文化戦線には、二つの階級、二つの路線のたたかひが存在している。つまり、プロレタリアートとブルジョアジーとの、文化戦線における指導権争奪のたたかひが存在している。わが党の歴史では、「左」右の日和見主義に反対するたたかひに、文化戦線の二つの路線のたたかひも含まれていた。

王明路線は、かつてわが党内にはらんしたブルジョア思潮である。一九四二年からはじまつた整風運動において、毛主席はまず王明の政治路線、軍事路線、組織路線に理論面から徹底的な批判をくわえ、つづいて王明に代表される文化路線にも理論面から徹底的な批判をくわえた。毛主席の「新民主主義論」と「延安の文学・芸術座談会における講話」は、文化戦線での二つの路線のたたかひにたいする、もつともとつた、もつとも全面的な、もつとも体系的な歴史的総括であり、マルクス・レーニン主義の世界観と文学・芸術理論を継承し発展させたものである。

わが国の革命が社会主義の段階にはいつたのち、われわれが文化戦線ですすめた一連の重大なたたかひ、たとえば映画(武訓伝)①にたいする批判、「紅樓夢」研究②にたいする批判、胡風反革命集團③にたいする闘争、反右派闘争、ここ三年らしいの社会主義文化大革命などは、すべて党中央と毛主席がみずから指導したものである。毛主席の二つの著作「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と「中国共産党全国宣伝活動会議における講話」は、わが国と各国の革命的思想運動、文学・芸術運動の歴史的経験についての最新の総括であり、マルクス・レーニン主義の世界観、文学・芸術理論をあらたに発展させたものである。

毛主席のこの四つのかがやかしい著作は、偉大な毛沢東思想の重要な構成部分であり、現代のマルクス・レーニン主義の世界観、文学・芸術理論の最高峰であり、われわれの文学・芸術活動にたいする最高の指示であって、われわれプロレタリアートが長期にわたって十分に依拠できるものである。

建国後の十数年らい、文学・芸術界には毛沢東思想に對立する反党的、反社会主義的な黒い糸が存在している。この黒い糸とは、ブルジョアリーの文学・芸術思想、現代修正主義の文学・芸術思想といわゆる三〇年代の文学・芸術とが結びついたものである。「真実描写」論④、「リアリズム大道」論⑤、「リアリズム深化」論⑥、「題材決定」反対論⑦、「中間人物」論⑧、「硝煙臭」反対論⑨、「時代精神合流」論⑩などが、その代表的な論点である。これらの論点は、そのほとんどが毛主席の「延安の文学・芸術座談会における講話」ですすでに批判されたものであった。映画界ではまた「離典背道」論、つまり、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の経典から離れ、人民の革命戦争の道にそむくという主張をもち出した者もいる。ブルジョアリーと現代修正主義の、この文学・芸術思想の逆流が影響し、あるいは支配したため、ここ十数年らい、人民戦争を反映し、人民の軍隊やその他の軍事的題材をえがいた諸作品をみると、ほんとうに革命的な英雄的人物をたたえて、労働者、農民、兵士に奉仕し、社会主義に奉仕したりつばな作品、あるいは基本的につばな作品は、あるにはあるがあまり多くなく、中間状態の作品がすくなくない。ほかに反党的、反社会主義的な毒草がいくらかある。一部の作品は、歴史上の事実をねじまげ、正しい路線をしめさず、もつぱら誤った路線をえがいている。一部の作品は、英雄的人物をとりあげても、すべて規律をおかす人物としてえがきあげ、あるいは英雄像をつくりあげても、作爲的な悲劇的結末でかれを死なせている。一部の作品は、英雄的人物をえがかないで、もつぱら中間的な人物、実

際には立ちおくれた人物をえがき、労働者、農民、兵士の形象を戯画化している。ところが、敵をえがくばあいには、人民を搾取し抑圧する敵の階級の本質を暴露せず、逆に敵を美化してさえている。また一部の作品は、もつぱら恋愛や低俗な趣味をあつかい、「愛」と「死」が永遠のテーマなどといっている。これらはすべて、ブルジョア的、修正主義的なものであって、断固反対しなければならない。

社会の文学・芸術戦線における二つの道のたたかいは、かならず軍隊に反映してくるものである。軍隊は、真空のなかで生活しているわけではなく、けつして例外ではありえない。わが軍はプロレタリアート独裁の主要な道具である。党の指導する人民の軍隊がなければ、革命の勝利もなく、プロレタリアート独裁もなく、社会主義もなく、また人民のすべでもない。そのため、敵はかならずあらゆる手をつくしてわが軍を各方面から破壊しようとするであろうし、またかならず文学・芸術の武器をもちいてわが軍を腐食しようとするであろう。これにたいし、われわれは警戒心を高めなければならない。ところが、このような見方をしない者がいる。かれらは、部隊における文学・芸術の問題はすでに解決済みで、主要な問題は芸術的水準を高めることである、といっている。こうした観点は誤っており、きわめて有害であって、具体的な分析にも欠けている。実際には、軍隊の文学・芸術は、あるものは方向が正しく芸術的水準も比較的に高いが、あるものは方向が正しくても芸術的水準が低く、あるものは政治的方向と芸術的水準のどちらにも重大な欠陥あるいは誤りがあり、またあるものは反党的、反社会主義的な毒草である。十数年らい、部隊の文学・芸術活動家のなかにも、文学・芸術戦線における階級闘争のあらしのなかで試験にたえきれず、大なり小なり誤りをおかす者が出た。このことは、軍隊の文学・芸術活動も、程度の差こそあれ、反党的、反社会主義的な黒い糸の影響をうけていることを物語るものである。わ

れわれはかならず党中央と毛主席の指示にもとづいて、積極的に文化戦線の社会主義大革命に参加し、この黒い糸を徹底的にのぞきさり、この黒い糸の部隊への影響を徹底的に一掃しなければならぬ。この黒い糸をのぞきさつたのちにも、また将来の黒い糸があらわれるであろう。そのときはふたたび闘争しなければならぬ。これは、なみなみならぬ、複雑な、長期にわたるたたかいであり、数十年、さらには数百年の努力を必要とするであろう。確固としてゆるぎなく社会主義の文化大革命をやりとげることが、わが軍の革命化にかかわる大きな事柄であり、わが国の革命の前途にかかわる大きな事柄であり、また世界革命の前途にかかわる大きな事柄でもある。

### 文化大革命の新たな情勢

一九六二年九月、毛主席は、党の第八期中央委員会第一〇回総会で、絶対に階級と階級闘争を忘れてはならない、と全党と全国人民に呼びかけたが、そのご、文化戦線で、プロレタリア思想を興しブルジョア思想を滅ぼすたたかいは一段と進展した。

ここ三年、社会主義の文化大革命には、すでにあらたな情勢があらわれている。そのもつともきわだった実例は、革命的な現代もの京劇の出現である。京劇改革にたずさわった文学・芸術活動家は、党中央と毛主席の指導のもとに、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を武器として、封建階級、ブルジョアジー、現代修正主義の文学・芸術にたいし、勇敢でねばり強い攻撃をくりひろげた。そのほこ先のむかうところ、京劇というこのもつと

もがん固なとりでも、思想内容から芸術形式にいたるまできわめて大きな革命をひきおこし、それがまた、文学・芸術界の革命的变化をおこすさきがけとなった。革命的な現代もの京劇《紅灯記》《沙家浜》《威虎山奪取》《白虎連隊を奇襲する》その他、バレエ《女性第二中隊長》、交響曲《沙家浜》、塑像《小作料取立所（収租院）》などは、広はん労働者、農民、兵士大衆から太鼓判をおされ、内外の観衆のきわめて大きな歓迎をうけている。これは社会主義文化革命に深い影響をおよぼすはじめての壮挙であった。このことは、京劇というもつともがん固なとりでも攻め落とし革命化することができ、バレエ、交響曲、塑像などのような外来の古典的芸術様式も改造し利用することができる、ましてその他の芸術の革命にたいしてはなおさら確信をもつべきであることを、力強く立証している。同時に、これらの事実はまだ、種々さまざまな保守派といわゆる「切符売上げ」論、「外貨価値」論、「革命的出品輸出不可能」論などに力強い反撃をくわえている。

ここ三年、社会主義文化大革命のもう一つのきわだった実例は、思想戦線と文学・芸術戦線における労働者、農民、兵士の広はん大衆活動である。労働者、農民、兵士大衆のあいだから、毛沢東思想を実際のなかから表現した多くのすぐれた哲学論文がたえずあらわれている。同時に、わが国の社会主義革命の偉大な勝利をたたえ、社会主義建設の各戦線における大躍進をたたえ、われわれの新しい英雄的人物をたたえ、われわれの偉大な党と偉大な指導者毛主席の英明な指導をたたえる多くのすぐれた文学・芸術作品もたえずあらわれている。とくに労働者、農民、兵士が壁新聞や黒板新聞に発表したおびただしい詩歌は、内容からいっても形式からいっても、まったく新たな時代を切りひらいている。

わが部隊の文化活動にも、ここ数年、ひじょうによい情勢があらわれている。林彪同志が軍事委員会の仕事を

担当するようになってから、文学・芸術活動に多大の注意がはらわれ、多くの重要な指示があたえられた。一九六〇年における中国共産党中央委員会の軍事委員会拡大会議の『軍隊の政治思想活動強化についての決議』は、部隊の文学・芸術活動は「部隊の任務および思想状況と密接にむすびつけて、プロレタリア思想の高揚とブルジョア思想の消滅、戦闘力の強化と向上に奉仕しなければならない」とはっきり規定している。大多数の部隊の文学・芸術活動家は政治を先行させ、毛主席の著作を実際と結びつけて学び、運用し、末端の部隊、農村、工場に深くはいつていき、社会主義教育運動に積極的に参加し、労働者、農民、兵士と結びつき、鍛錬を強化し、思想を改造して、プロレタリアートとしての自覚を高めた。その結果、ネオンの下の哨兵その他のすぐれた劇、『欧陽海の歌』その他のすぐれた小説が創作され、さらに比較的すぐれた報告文学、戦士の詩歌、音楽や絵画、美術作品も創作された。同時に、一群の前途有望な作家もあらわれた。

もちろん、これらはみな社会主義文化革命の初歩的な成果であつて、万里の長征の第一歩にすぎない。この成果を守り発展させ、社会主義文化革命を最後までやりとげるためには、われわれは長期にわたるなみなみならぬ努力をはらわなければならない。わが軍の文学・芸術活動家は、奮起して、しかるべき貢献をしなければならない。

## 社会主義の斬新なものをかかげ、プロレタリアートの

### 独特なものをうちたて、すぐれた手本をつくり出す

社会主義の新しい文学・芸術を生み出すには、すぐれた手本をつくらなければならない。指導的同志はみずから

この仕事にとりくまなければならない。われわれは、すぐれた手本をもち、この面での成功の経験があつてこそ、説得力をもち、陣地をしつかりと占領することができるのである。

われわれは敢然と、斬新なものをかかげ、独特なものをうちたてなければならない。つまり、社会主義の斬新なもののかかげ、プロレタリアートの独特なものをうちたてなければならない。毛沢東思想で武装した労働者、農民、兵士の英雄的人物を浮きばりにする努力は、社会主義の文学・芸術の根本的な任務である。毛主席が指摘しているように、「諸君がブルジョア文学者・芸術家なら、プロレタリアートをほめたたえずに、ブルジョアシーをほめたたえるであろう。諸君がプロレタリア文学者・芸術家なら、ブルジョアシーをほめたたえずに、プロレタリアートと勤労人民をほめたたえるであろう。この二つのうちのどちらかである」。したがって、どの階級をうたいあげ、どの階級の英雄的人物を浮きばりにし、どの階級の人物に文学・芸術作品のなかで支配的地位を占めさせるかは、文学・芸術戦線におけるプロレタリアートとブルジョアシーとの階級闘争の焦点であり、こゝとなつた階級の文学・芸術を区別する境界線である。

毛沢東思想にはぐくまれて、つぎつぎと生まれだつた労働者、農民、兵士の英雄的人物、そのすぐれた品性は、プロレタリアートの階級性の集中的なあらわれである。われわれは熱情をこめて労働者、農民、兵士の英雄的な形象を浮きばりにしなければならない。われわれは典型をつくりあげなければならない。実在の人物や実際の出来事に制約されてはならない。毛主席は、「文学・芸術作品に反映されている生活の方が普通の実際生活にくらべて、より高度で、より強烈で、より集中的で、より典型的で、より理想的で、したがってまた、より普遍的であることができ、また、そうあるべきである。」とのべている。そうするには、われわれの作家が長期にわたる生



活の蓄積のなから集中的に概括をおこない、さまざま典型的人物をつくり出さなければならぬ。

英雄的人物をうまく浮きばりにしようとするれば、創作方法のうえで、ブルジョアジーの批判的リアリズムとブルジョアジーのロマンチズムの方法をとるのではなく、革命的リアリズムと革命的ロマンチズムをむすびつけた方法をとらなければならない。

部隊の作家は、革命戦争をえがき、毛主席の人民戦争の思想を宣伝し、革命戦争のなかでの英雄的人物を浮きばりにすることを、自分の光榮ある任務と見なさなければならぬ。革命戦争をえがくには、まず戦争の性質をあきらかにし、正義は敵の側にはなく、われわれの側にあることをはっきりさせなければならぬ。作品のなかでは、われわれの困難にめげないたたかいと英雄的な犠牲をえがかなければならぬが、革命的英雄主義と革命的樂觀主義をもえがかなければならぬ。戦争のむごたらしさをえがくにあたつて戦争の恐ろしさを誇張してはならず、革命戦争のきびしさをえがくにあたつて、その苦しさを誇張してはならない。革命戦争の残酷さと革命的英雄主義、革命戦争のきびしさと革命的樂觀主義は、ともに対立面の統一であるが、なにごとの主要な側面であるかをはっきりさせなければならぬ。この関係をとりちがえると、ブルジョア平和主義の傾向が生まれてくることとなる。人民革命戦争をえがくばあいに、遊撃戦を主として運動戦を従とする段階であつても、または運動戦を主とする段階であつても、党の指導する正規軍と遊撃隊と民兵の関係、武装した大衆と武装していない大衆の関係を正しくえがかなければならぬ。

プロレタリア文学・芸術のすぐれた手本をつくるのは、けつして生やさしいことではない。われわれは戦略の面ではかならずこれを蔑視しなければならぬが、戦術のうえではかならずこれを重視しなければならない。す

ぐれた作品を創作するのは、きびしい過程である。創作を指導する同志は、けつしてだんなのような態度をとつてはならないし、軽はずみであつてはならないし、創作者と苦楽をともにして、ほんとうにひたむきな努力をしなければならぬ。われわれは、できるだけナマの資料を手にいれなければならない。失敗や誤りを恐れてはならないし、失敗や誤りを許さなければならぬし、また誤りを改めることを許さなければならない。われわれは、大衆に依拠し、大衆のなから出て大衆のなかへはいり、長期にわたつて実践をくりかえし、すぐれたものにさらにみがきをかけ、革命的な政治的内容と可能なかぎり完全な芸術的形式との統一を実現するように努めなければならない。われわれは、実践のなかでいち早く経験を総括し、しだいに各種の芸術の法則を把握していかなければならない。そうしなければ、すぐれた手本をつくることはできないのである。

多くの重要な革命史のテーマや現実のテーマは、計画的に段取りを追つて創作を組織するよう、さしせまつてわれわれに要求している。われわれはまた、これらの創作をつうじて、真のプロレタリア文学・芸術の中堅となる隊列をそだてあげ、鍛えあげなければならない。

### 思想を解放し、迷信を打破する

社会主義の文化革命では、一方ではうち破らなければならず、他方ではうちたてなければならぬ。徹底的にうち破らなければ、ほんとうにうちたてることができない。社会主義文化革命をおこない、社会主義の新しい文学・芸術を生み出すには、思想を解放し、迷信を打破しなければならない。

われわれは、いわゆる三〇年代の文学・芸術にたいする迷信を打破しなければならない。当時、左翼文学・芸術運動は、政治的には王明の「左」翼日和見主義路線をとり、組織的には閉鎖主義的、セクト主義的であった。その文学・芸術思想は、実際には、ロシアのブルジョア文芸評論家ベリンスキー<sup>⑩</sup>、チエルヌイシエーフスキー<sup>⑪</sup>、ドブロリューボフ<sup>⑫</sup>などの思想であった。かれらは帝制ロシアのブルジョア民主主義者であつて、その思想はマルクス主義ではなく、ブルジョア思想であつた。ブルジョア民主主義革命は、ある搾取階級が他の搾取階級に反対する革命である。あらゆる搾取階級を最終的に消滅する革命は、プロレタリア社会主義革命だけである。したがつて、われわれはいかなるブルジョア革命家の思想をも、われわれプロレタリアートの思想運動、文学・芸術運動の指導方針とすることは断じてできない。三〇年代にも、すぐれたものはあつた。それが魯迅<sup>ルンペン</sup>をはじめとする戦闘的な左翼文学・芸術運動である。三〇年代の後期になると、当時左翼の一部の指導者は王明の右翼投降主義路線の影響をうけて、マルクス・レーニン主義の階級的観点にそむき、「国防文学」というスローガンをうち出した。このスローガンはブルジョアジーのスローガンである。ところが、「民族革命戦争の大衆文学」というプロレタリアートのスローガンは魯迅がうち出したものである。一部の左翼文学・芸術活動家、とくに魯迅は文学・芸術が労働者、農民に奉仕すべきであり、労働者、農民がみずから文学・芸術を創作すべきであるというスローガンをもうち出した。だが、文学・芸術が労働者、農民、兵士とむすびつくという根本的な問題を体系的には解決しなかつた。かれらの圧倒的多数のものはやはりブルジョア民族民主主義者であつて、あるものは民主主義革命の関所さえこえることができず、あるものは社会主義の関所をうまくこえることができなかった。われわれは、中国と外国の古典文学にたいする迷信を打破しなければならない。中国の古典文学・芸術とヨ

ロッパ（ロシアを含む）の古典的文学・芸術がわが国の文学・芸術界にあたえた影響は小さくなく、一部の人はそれを經典として全面的にうけいれている。毛主席はわれわれに、「文学・芸術において、むかしの人や外国の人のものの無批判なひきうつしやものまねこそ、もつとも見こみのない、もつとも有害な文学教条主義、芸術教条主義である。」と教えている。むかしの人や外国の人のものも研究しなければならず、その研究をこぼむの誤りである。だが、かならず批判の目をもって研究し、古代のものを現代に役だて、外国のものを中国に役だてるようにしなければならない。

十月革命のちにあらわれた一群の比較的すぐれたソ連の革命的文学・芸術作品については、これもやはり分析してかかる必要があるが、盲目的に崇拜してはならず、ましてや盲目的に模倣してはならない。盲目的な模倣は芸術にはなりえない。文学・芸術の源は生活にしかなく、生活だけが文学・芸術の唯一の源である。古今中外の文学・芸術の歴史はこのことを立証している。

### 民主集中制を實行し、大衆路線を歩まなければならない

文学・芸術活動では、指導者も創作者も、民主集中制を實行しなければならず、「衆の声」を提唱し、「ツルの一声」に反対しなければならない。われわれは、大衆路線を歩み、政治先行というカギをしつかりと握らなければならない。これまで一部のものは、作品を一つつくりあげると、大衆の意見に耳をかたむけず、指導者にせまつてむりやりに頭を縦にふらせようとする。これはひじょうに悪い作風である。創作を指導する幹部は、文

学・芸術創作にたいして、つねにつきの二点を頭に入れておかなければならない。第一は、広はん大衆の意見によく耳を傾けるよう心がけること、第二は、これらの意見を分析し、よいものは取りいれ、よくないものは取らないよう心がけることである。まったく欠陥のない作品などはない。基調さえよければ、その欠陥と誤りを指摘して、それを是正させるべきである。悪い作品は、かくしてはならず、大衆のまえにもち出して大衆に批評させるべきである。われわれは大衆を恐れてはならず、断固として大衆を信頼しなければならぬ。大衆はわれわれに数々の貴い意見を出してくれる。考え方のあまい人にも、その識別能力を高めることができる。

### 革命的、戦闘的、大衆的な文芸批評を提唱する

われわれは、革命的、戦闘的、大衆的な文芸批評を提唱し、少数のいわゆる「文芸評論家」(つまり、方向を誤った批評家または軟弱無力な批評家たち)の文芸批評独占を打破しなければならない。われわれは、文芸批評の武器を広はん労働者、農民、兵士大衆ににぎらせ、職業評論家と大衆評論家とを結びつけなければならない。文芸批評においては、戦闘性を強め、無原則で俗悪なおだてあげに反対しなければならない。また、文風をあらため、わかりやすい短文をたくさん書き、文芸批評を短剣と手投げ弾に変えて、二〇〇メートル内の至近戦でのすじ金入りの腕まえを鍛えることを提唱しなければならない。もちろん、深い理論をもった、体系的な、比較的ながい論文もいくらか書く必要がある。事実をならべ、道理を説くべきであって、専門用語で人をおどしあげてはならない。こうしてこそ、いわゆる「文芸評論家」たちの武装を解除することができるのである。文芸批

評をおこなうばあい、よい作品あるいは基本的によい作品にたいしては、これを熱情こめて支持しなければならず、また誠意をもってその欠陥を指摘することができる。悪い作品にたいしては、原則的な批判をくわえなければならぬ。文芸理論の面では、一部の代表的な誤った論点にたいし、計画的に徹底的な批判をくわえなければならぬ。われわれは、人びとからこん棒をふりまわすとのしられることを恐れてはならず、単純で乱暴だといわれることについてはこれを分析する必要がある。われわれの批評のあるものは、基本的に正しくても、分析が足りず、論拠が不十分であり、説得力に欠けている。これは改善すべきである。あるものは認識の問題であって、最初のうちはわれわれを単純で乱暴だと言っている。だが、敵がわれわれの正しい批判を単純で乱暴だとのしるばあいは、かならず断固反撃しなければならない。文芸評論を恒常的な活動とすべきであり、文学・芸術闘争をくりひろげる重要な方法とすべきである。それは党が文学・芸術活動を指導する重要な方法でもある。正しい文芸批評がなければ、正しい文学・芸術の方向を堅持することはできず、創作を繁栄させることもできない。

### 毛沢東思想で文学・芸術関係の幹部を再教育し、

#### 文学・芸術の隊列を再編成する

19 社会主義の文化革命を徹底的にすすめるためには、文学・芸術関係の幹部を再教育し、文学・芸術の隊列を再編成しなければならない。はやくも井岡山での闘争のころ、労働赤軍は、毛主席の直接の指導のもとに、「古田

会議の決議」のかがやかしい光にみちびかれ、赤色文学・芸術の隊列をつくりあげた。抗日戦争の時期には、わが党とわが軍の政治的、軍事的な力が発展するにともない、われわれの文学・芸術の隊列もひじょうに大きな発展をとげた。根拠地と軍隊では、われわれは革命的な文学・芸術活動家をかなり多く養成した。とくに「延安の文学・芸術座談会における講話」が発表されたのちには、かれらは正しい方向を堅持し、労働者、農民、兵士と結びつく道を堅持し、革命の過程で積極的な役割をはたした。問題は、全国解放後、大都市にはいつてから、一部のものがブルジョア思想の侵食に抗しきれず、そのため、前進の過程で落伍してしまったことである。新しく部隊にはいった文学・芸術活動家も、種々さまざまなブルジョア文学・芸術思想の影響をもちこんできた。また少数のものは、根本的に自己改造をしておらず、ブルジョア思想の立場を固執している。

われわれの文学・芸術は、プロレタリアートの文学・芸術であり、党の文学・芸術である。われわれを他の階級から区別するもつとも顕著な目じるしは、プロレタリアートの党性の原則である。他の階級の代表者もかれらなりの党性の原則をもっており、しかもひじょうにがん強であることを、知っておかなければならない。創作思想の面、組織路線の面、工作作风の面のいずれを問わず、われわれはプロレタリアートの党性の原則を堅持し、ブルジョア思想の侵食に反対する必要がある。ブルジョア思想とはつきり一線を画し、けつして平和共存してはならない。

わが軍の文学・芸術活動家もつているさまざまの問題は、大多数の人のばあい、考え方の問題であり、教育して高める問題である。われわれは、毛主席の著作を最高の指示と見なし、毛主席の文学・芸術思想を真剣に学び、身につけ、「運用」の点に思い切つて力をいれ、実際と結びつけて学び、運用し、思想と結びつけ、実際と

結びつけて、毛沢東思想をほんとうに自分のものとしなければならない。われわれは、かならず毛主席の教えを守り、「長期にわたつて、無条件に、誠心誠意、労働者、農民、兵士大衆のなかにはいり、はげしいたたかひのなかにはいり、もつとも広くもつともゆたかな唯一の源のなかにはいつて」、労働者、農民、兵士と結びつき、思想を改造し、自覚を高め、名利を追わず、苦しみや死を恐れず、ひたすら全中国人民と全世界人民に奉仕しなければならぬ。われわれは生涯をつうじて、毛主席の著作を読み、革命をおこない、思想を改造しなければならぬ。こうしてこそ、林彪同志の指示したように、思想にもすじ金はいり、生活にもすじ金はいり、技術にもすじ金はいるのである。そうしてこそ、われわれの文学・芸術活動はよりよく労働者、農民、兵士に奉仕し、社会主義に奉仕し、部隊の戦闘力の強化と向上に奉仕することができるのである。

社会主義文化大革命の高まりはすでにあらわれており、社会主義文化大革命の大衆運動はいまおこりつつある。この偉大な革命の潮流はかならず、ふるい時代のブルジョア文学・芸術思想のよごれをのこらず洗いながし、社会主義的プロレタリア文学・芸術の新紀元を切り開くことであろう。このようなひじょうにすばらしい革命情勢を迎え、われわれは徹底的な革命派になることを誇りとすべきである。われわれの社会主義革命は、搾取制度を最終的に消滅し、人民大衆を毒するあらゆる搾取階級のイデオロギーを根こそぎにする革命である。われわれは、確信と勇気をもち、前人のなしとげえなかつたことを敢然となしとげなければならぬ。われわれは、毛沢東思想の偉大な赤旗をいつそう高くかかげ、党中央、毛主席、軍事委員会の指導のもとで、社会主義文化大革命に積極的に参加し、確固としてゆるぎなく社会主義文化大革命をやりとげ、われわれの偉大な国、偉大な党、偉大な人民、偉大な軍隊に恥じない、社会主義の新しい文学・芸術の創造につとめなければならない。

注

- ① 公武訓伝 中国人民の革命的伝統をけなし、ブルジョア改良主義、降伏主義をもちあげた悪い映画。武訓は清朝のころの人で、地主の手先であったが、この映画では武訓は、貧しい農民の子弟に教育の機会をあたえるため惜しみなく自分を犠牲にした「偉大な人物」としてえがかれていた。一九五一年五月二〇日、『人民日報』は社説をかかけ、公武訓伝の反動性をきびしく指摘し、公武訓伝にたいする批判をくりひろげるよう全国によびかけた。これは、新中国が成立してのち、ブルジョアの反動思想にたいする最初の大規模な批判であった。
- ② 「『紅樓夢』研究」 著者は俞平伯。この本は、ブルジョア観念論の観点を用い、煩きな考証的方法で「紅樓夢」についての論証をおこなったものである。一九五四年九月、「『紅樓夢』研究」にたいする批判が全国にわたっておこなわれた。これは、イデオロギーの領域におけるプロレタリア思想とブルジョア思想のたたかいであり、ブルジョア観念論に反対するたたかいであった。
- ③ 胡風反革命集団 胡風は裏切り者であったが、そのご革命の隊伍にまぎれこんだ。解放後、かれは文学・芸術界で秘密結社を組織し、反革命活動をすめた。一九五四年、かれは、中国共産党中央委員会に三〇万語におよぶ「意見書」を提出し、党の文学・芸術方針と毛沢東の文学・芸術思想をとげとげしく攻撃した。一九五五年の五月と六月に、『人民日報』は、胡風反革命集団についての資料を三回にわたってあいついで発表し、この集団の反革命の陰謀を徹底的に暴露し、粉砕した。

- ④ 「真実描写」論 「真実描写」論は、創作上の修正主義的主張である。反革命分子胡風が「真実描写」を主張し、馮雪峰もそれを主張した。かれら一味が「真実描写」を強調したのは腹に一物あったものであり、「真実描写」という看板

のもとに、社会主義の文学・芸術の階級性、傾向性に反対し、文学・芸術が社会主義の精神で人民を教育するのに反対しようとするものであった。かれらは、社会主義の現実の生活の中にもっぱら暗すみや歴史のごみをさがそうとしたり、「真実描写」をよびかけたりした。その目的は、光に満ちた社会主義社会を黒一色に塗りつぶそうとすることにあった。

- ⑤ 「リアリズム大道」論 文学・芸術界の一部の反党・反社会主義分子は、毛主席の「延安の文学・芸術座談会」における講話」に反対し、それがすでに時代おくれになったので、ほかに広びろとした道なるものをひらかねばならないと言った。秦兆陽を代表とする人びとが提起したこの「リアリズム大道」論は、そうしたしるものであった。かれらは、労働者、農民、兵士に奉仕するということも正しく広びろとした道はせますぎるし、「硬直なドグマ」であり、「人びとに固定した変化のない小道を歩かせる」ものだと考えた。かれらは、作家たちに「各人の生活の経歴や修養、気質、芸術的個性などさまざまな条件のちがいがい」にもとづいて、書きたいものを書き、労働者、農民、兵士に奉仕する方向から離れて「創造性を發揮する限りない広びろとした天地」をさがし求めるよう、よびかけた。

- ⑥ 「リアリズム深化」論 邵荃麟は「中間人物をえがく」ことをよびかけるとともに、「リアリズム深化」の理論を提起した。この理論は、作家が人民大衆の身についている「ふるいもの」を表現し、「数千年来の単独経営農民の精神的重荷」を概括し、入り組んで複雑な性格をもった「中間人物」像をえがくことを要求した。また、作家が「平凡」なものを書き、それによって「小をもって大を見」「ひと粒の米から大きな世界を見る」ことを実現するよう要求した。かれの見るところでは、文学作品は心につばいの矛盾をかかえた「中間人物」をえがき、「数千年来の単独経営農民の精神的な重荷」を概括し、単独経営経済から集団経済へ移る単独経営農民の「苦難の過程」をえがいてこそ、現実性をもっているといえるのであり、そうしさえすれば、リアリズムは「深化」することになり、これに反して、人民大衆の革

命的な英雄主義をたたえ、人民大衆の英雄像をえがくのは、かえって真実のものでなく、現実的なものではない、というのである。「リアリズム深化」論は、ブルジョアジーの批判的リアリズムから直接仕入れたらるもので、一種のひじょうに反動的な文学・芸術理論である。

- ⑦ 「題材決定」反対論 「題材決定」反対論は、一種の反社会主義の文学・芸術思想である。田漢、夏衍などの人びとはみな、こうした主張の積極的な鼓吹者である。プロレタリア作家はどんなテーマを選び、どんなテーマを書く場合も、まず第一にそのテーマが人民にとって有益であるかどうかを考える。ひとつのテーマを選ぶのも、それを書くのもみな、プロレタリア思想を興し、ブルジョア思想を滅ぼして、あくまで社会主義の道を歩むように大衆を上げますためである。「題材決定」反対論者は、こうした正しい主張がしゃくし定規であり、「徹底的にそれをうち破る必要がある」と考えている。かれらはテーマをひろげるという口実で、「革命の経典」を離れ、「戦争の道」にそむくことを宣伝した。かれらは、中国の映画は革命や武装闘争をえがくのがあまりに多すぎる、革命の経典を離れ、戦争の道にそむかなければ、映画の新生面をきりひらくことはできない、とも言った。また一部の人は、「人情味」や「人類愛」「小人物」や「小さなこと」をえがく必要がある、と宣伝した。こうした主張は、実際には、文学・芸術をプロレタリアートの政治に奉仕する軌道からそらせようとしたものであった。

- ⑧ 「中間人物」論 「中間人物をえがく」という誤った主張のおもな唱道者は、中国作家協会の副主席であった邵荃麟である。かれは、一九六〇年の冬から一九六二年の夏にかけて、この主張をくり返しふいふうした。かれは、中国の貧農、下層中農の大多数が社会主義と資本主義の間を動揺している「中間状態」にある人間だと誹謗し、文学・芸術作品はこうした「中間人物」をたくさん書くべきだと主張した。その目的は「中間人物をえがく」ことをつうじて、社会主義にたいする懷疑や動揺の感情をふりまき、文学・芸術作品の中に社会主義時代の英雄をえがくことに反対し、それを

ホイコットすることであった。

- ⑨ 「硝煙臭」反対論 現代修正主義の文学は、さかんに戦争の恐怖をばらまき、「存命哲学」、降伏主義を宣伝し、人民の闘志をゆるめさせ、帝国主義のために骨を折っている。ここ数年らい、中国でも一部の人が、文学作品に硝煙のにおいがひどすぎるし、舞台には鉄砲が多すぎる、そのため芸術性がみられなくなったと再三騒ぎたて、作家は「革命の経典」を離れ、「戦争の道」にそむかねばならない、と言っている。「硝煙臭」に反対するという主張は、その本質において、修正主義の文学・芸術思潮の中国文学・芸術界における反映である。

- ⑩ 「時代精神合流」論 周谷城ウウキョウケンを代表とする人びとがもちだした反マルクス・レーニン主義的誤った議論である。周谷城は、時代精神が時代の前進をおしすすめる精神であり、時代精神を代表するものが時代の前進をおしすすめる先進的な階級であることを認めなかった。かれは、「異なった階級の異なった思想・意識」が「合流」してこそ、時代精神といえるのであり、「非革命、不革命、ないしは反革命のさまざまの」精神もみな、時代精神の中に包括されねばならない、と主張した。「時代精神合流」論は、真正正銘の階級協調論であり、徹頭徹尾の反動理論である。

- ⑪ ベリンスキー（一八一一～一八四八年） ロシアの民主主義者、文学評論家、哲学者、美学者。文芸評論の活動をつうじて、ツァーリ時代の農奴制と専制政体に反対した。

- ⑫ チェルヌイシェーフスキー（一八二八～一八八九年） ロシアの民主主義者、評論家、作家。革命的民主主義の思想を堅持し、ツァーリと農奴制に反対した。

- ⑬ ドブローリューポフ（一八三六～一八六一年） ロシアの民主主義者、文芸評論家。ツァーリの政体と農奴制に反対する活動をおこなった。

## 絶対に階級闘争を忘れてはならない

『解放軍報』社説

(一九六六年五月四日)

本紙が「毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかけ、社会主義の文化大革命に積極的に参加しよう」と題する社説を発表すると、軍の内外で強い反響がおこった。広はんな労働者、農民、兵士大衆と革命幹部は、高度の革命的熱情にもえて、ぞくぞくと本紙に投書、投稿し、積極的に戦闘に参加し、文化の領域における反党的、反社会主義的な黒い糸にたいし、きわめて大きな憤激をしめしている。人びとが気づいているように、いま文化戦線でもりひろげられている大論争は、決していくつかの文章、いくつかの脚本、いくつかの映画の問題にすぎないのでなく、また学術上の論争にすぎないのでなく、ひじょうに鋭い階級闘争であり、毛沢東思想を守る原則的な闘争であつて、イデオロギーの領域でプロレタリアートとブルジョアジーとのどちらがどちらに勝つかという激烈かつ長期の闘争である。われわれは、学術界、教育界、報道界、文学・芸術界、その他各種の文化界において、プロレタリア思想を大いにおこし、ブルジョア思想を大いにほろぼさなければならぬ。これは、現段階におけるわが国の社会主義革命が深く発展するうえでのカギとなる問題であり、全局にかかわる問題であり、わが党および国家の運命と前途にかかわるもつとも重要な事柄であり、また世界革命にかかわるもつとも重要な事柄

でもある。われわれの革命戦士はだれも、この闘争を放置するわけにいかず、無関心でいるわけにはいかない。われわれはかならず、党の呼びかけにこたえて、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、この階級闘争に積極的に参加し、社会主義の文化大革命を断固として最後までやりとげなければならない。

毛主席がわれわれに教えているように、社会主義社会にもお階級と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義という二つの道の闘争が存在する。経済戦線における（生産手段所有制における）社会主義革命だけでは、十分であり、また強固ではない。そのほかになお、政治戦線と思想戦線での徹底的な社会主義革命がなければならぬ。政治・思想の領域で社会主義と資本主義の間のどちらがどちらに勝つかという闘争は、ひじょうに長い時間をかけなければ解決できないものである。数十年以内では不可能であり、百年から数百年の時間をかけなければ、成功しないであろう。事實は毛主席が指摘しているとおりであつて、解放後一六年らい、文化戦線における階級闘争は、一年または一カ月、あるいは一日として停止したことがない。たとえば、一九五一年の映画『武訓伝』にたいする批判、一九五四年の「『紅樓夢』研究」にたいする批判と、その後の胡適の反動思想にたいする批判、一九五五年の胡風にたいする批判と、胡風反革命集団にたいする闘争、一九五七年の文化戦線におけるブルジョア右派勢力の気遣いじみた攻撃にたいする反撃、一九五九年らしいの映画、演劇、文学などの面におけるブルジョアの、修正主義的な文学・芸術の毒草のおびただしい出現と、われわれのそれらにたいする闘争、一九六四年に楊献珍の「合二而一」論にたいしておこなわれた批判と、いま呉晗の『海瑞の免官』にたいする批判にたいして深くくりひろげられている大論争などがそれである。闘争に闘争がつづき、闘争はそのたびごとに深まってくる。この黒い糸をとりのぞいたのちにも、将来また黒い糸があらわれ、ふたたび闘争しなければならない

だろう。これは、階級闘争が人の意志によって左右されず、避けられないものであることを物語っている。反党的、反社会主義的分子は、いつもありとあらゆる方法で、しつようにブルジョアの本性をあらわすものである。かれらにそれを反映させず、表現させないでおこうとしても、それは不可能である。これらの人びとは、口先では社会主義を擁護しているが、実際には資本主義に心をひかれ、あくまでブルジョアジーのしかばねをだきしめて放さない。かれらは、プロレタリアート独裁にたいして敵対的な感情をもち、胸の底に党と社会主義にたいする憎しみと恨みをいだいており、それは、適当な気候にあつと、すぐ頭をもたげるし、すこしでも風が吹き草がなびくと、すぐさまつぎつぎに飛び出してくる。かれらは広はん大衆から再三にわたつて暴露され、批判され、打撃をうけると、いよいよむき出しでない、ずるがしこい、遠まわしの、まがりくねつた手口で、ひきつづき党と社会主義に攻撃をかけてきた。

とくに注目しなければならないことは、いま、このひとにぎりの反党的、反社会主義的分子が新たな階級闘争の情勢のもとでわれわれにくわえている攻撃には、新しい特徴があることである。かれらは、「赤旗」をふりかざして赤旗に反対し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の上衣をまとい、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想に反対している。かれらは、党と政府がかれらにあたえた職権を利用して、一部の部門と組織を一手に握り、党の指導にさからい、かれらの握っている道具をつかつて、反党的、反社会主義的な犯罪的陰謀をおこなっている。かれらの大多数は、いわゆる「権威者」であり、世間的な「名声」もあるもので、真相を知らない一部の人びとはいまなおかれらをいささか盲信している。かれらは、自分にはプロレタリアートと力くらべをする元手がまだあると思ひこみ、けんめいにブルジョア思想の頑固なとりでを守っている。かれらの反党的、反社会主



義的な活動は、孤立した偶然的現象ではなく、国際的には帝國主義、現代修正主義、各国反動派の反中国大合唱に呼応するものであり、国内的には打ち倒された反動階級の復活の活動と氣脈を通ずるものであり、党内では右翼日和見主義分子の反党活動としめしあわせたものである。かれらの反党的、反社会主義的活動は、一定の欺まん性と重大な危害性をおびている。われわれのかれらにたいする闘争は、食うか食われるかの闘争である。これにたいし、われわれは十分な認識と高度の警戒心をもたなければならぬ。ある人びとはよくない作品もすこし書いたことはあるが、党と一体であり、社会主義と一体である。かれらの欠陥や誤りは、実践のなかで改めることができる。このような同志は、ひとにぎりの反党的、反社会主義的分子と嚴格に区別すべきである。

毛主席は、はやくも全国的な勝利をかちとる前、「銃をもった敵が滅ぼされてからも、銃をもたない敵は依然として存在するのであつて、かれらはかならずわれわれと死物狂いのたたかひをするであろう。われわれはけつしてこれらの敵を軽んじてはならない。もし、われわれが現在このように問題を提起し、問題を認識しないならば、われわれはきわめて大きな誤りを犯すことになる」とわれわれをいましめている。資本主義の復活は、つねに暴力の形態をとるか、「平和的転化」の形態をとるか、あるいはこの二つをくみあわせた形態をとるものである。アメリカ帝國主義と内外の階級敵は、暴力によつてわれわれを倒そうとしているばかりでなく、そのうえ「平和的転化」の方法によつて「糖衣砲弾」でわれわれを征服しようとしている。かれらはあらゆる手を使つて、反動的な政治上、思想上の毒素をまきちらし、ブルジョア的生活様式をおしひろめ、それによつて共産主義者とプロレタリアートその他の革命的人民をむしばみ、とろかし、われわれの隊列のなかの意志の弱いものをブルジョア分子に墮落させ、社会主義をしいに資本主義に変質させようとしている。レーニンがつくりあげ、十

月革命の砲声のなかから生まれた、最初の偉大な社会主義國ソ連は、党と國家の指導権を乗つとつたひとにぎりの修正主義分子に握られ、あやつられて、すでに資本主義復活の道への「平和的転化」をおこなっているし、また現におこないつつあるという事実——これはきわめて大きな教訓である。毛主席はつぎのようにわれわれに教えている。「階級闘争、生産闘争、科学実験は、強大な社会主義國を建設するための三つの偉大な革命運動であり、それは共産主義者が官僚主義をのぞき、修正主義と教条主義をまぬがれ、永遠に不敗の地に立つしつかりした保証であり、また、プロレタリアートが広はんな勤労大衆と結びつき、民主主義独裁を実行することのできたしかな保証である。さもなければ、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、化けものどものたぐいがいつせいにとびだしてくるだろう。そして、われわれの幹部がそれを意に介せず、ひどい場合には多くのものが敵味方の区別がつかず、互いに結託し、敵によつてむしばまれ、分化、瓦解させられ、ひきずり出され、もぐりこまれ、さらに、多くの労働者、農民、知識人もまた敵の硬軟両様の手ぐちののつてしまうなら、それほど長い期間がたたなくても、つまり短くて数年、十数年、長くて数十年もたてば、不可避免的に全国的な規模の反革命の復活があらわれ、マルクス・レーニン主義の党は修正主義の党にかわり、ファシスト党にかわり、中国ぜんたいが変色してしまうだろう」われわれは毛主席のこの指示をかならず肝に銘じて、社会主義の時期の階級闘争を絶対に忘れてはならず、銃をもたない敵との戦闘を絶対にゆるがせにしてはならない。

毛主席は、「一定の文化（イデオロギーとしての文化）は一定の社会の政治と經濟の反映であり、さらに一定の社会の政治と經濟に大きな影響をあたえ、作用をおよぼす」。「文化革命は、イデオロギーのうえで政治革命と經濟革命を反映し、またそれらに奉仕するものである」とわれわれに教えている。毛主席はさらに、「……わ

われわれは、全体的な歴史の発展のなかでは、物質的なものが精神的なものを決定し、社会的存在が社会的意識を決定することをみとめるが、同時にまた、精神的なものの反作用、社会的意識の社会的存在にたいする反作用、上部構造の経済的土台にたいする反作用をみとめるし、またみとめなければならぬ……」ともわれわれに教えている。解放後一六年らい、わが国の社会主義の経済的土台とプロレタリアート独裁の権力はすでにうちたてられて、日ましに強固なものとなり、経済戦線と政治戦線における社会主義革命は偉大な勝利をおさめた。だが、打ち倒されたブルジョアジーその他の搾取階級の政治的観点とイデオロギーは、まだまだ大きな影響力をもっている。それらは、社会主義の経済的土台の発展をさまたげているばかりでなく、ブルジョアジーと修正主義の文化によつて資本主義復活の道をきりひらこうとやっきになっている。イデオロギーの領域でだれがだれに勝つかという問題は、まだまだ解決されてはいないのである。われわれは、かならず上部構造の経済的土台にたいする反作用を重視しなければならぬし、またかならずイデオロギーの領域における階級闘争を重視しなければならぬ。イデオロギーの領域における社会主義革命の勝利がなければ、経済戦線と政治戦線における社会主義革命も強固なものになりえない。

われわれは、ひとにぎりの修正主義分子やブルジョア分子がわれわれにくわえてくる気違いじみた攻撃を、それはたんに「書生の叛逆」にすぎず、大事にいたることはない、などと決して考へてはならない。また、われわれとかれらとの闘争は、「ペンのかたかい」にすぎず、大局にかかわることはない、などと決して考へてはならない。事実、いかなる反革命の復活も、まずイデオロギーから手をつけ、上部構造から手をつけ、理論、学術、文学・芸術などの精神面のものから手をつけて、自分のために世論をつくり出すものである。フルシチョフ修正

主義がソ連共産党の指導部を乗っ取つたのは、そうであつた。また、一九五六のハンガリーの反革命的暴動も、一群の修正主義とブルジョアジーの文学・芸術活動家や知識人がペトフィー・クラブをつくつて、急先鋒の役割をはたしたのである。いま、わが国の内部でひとにぎりの修正主義分子とブルジョア分子が党と社会主義に気違いじみた攻撃をくわえているのも、かれらの資本主義復活の美しい夢を実現しようとするものにはかならない。もしわれわれがこれらの銃をもたない敵にたいして警戒心をうしめない、断固とした反撃をくわえず、ブルジョア思想が自由にはんらんするのをそのままにして、その陰謀の実現をゆるすなら、われわれの社会主義の土台は掘りくずされ、われわれの国家も色が変わつてしまう危険にさらされることとなる。

われわれ中国人民解放軍は、党と毛沢東主席が創設して指導している労働者、農民の軍隊であり、プロレタリアート独裁の主要な支柱であり、社会主義事業の守り手である。われわれは、一方においては、銃をもつた敵をつよく警戒し、いついかなるときにもアメリカ帝国主義とその手先のわれわれにたいする武力攻撃をうち負かす用意をととのえていなければならないが、同時にまた、銃をもたない敵にたいしても高度の警戒心をもち、ブルジョアジーの反党的、反社会主義的な犯罪的陰謀を断固としてうちくだかなければならない。われわれの幹部と戦士は、実弾を撃ちあう戦場でまっしぐらに突入して敵陣を奪取する勇士にならなければならないし、同時にまた、「糖衣砲弾」に反対する政治・思想戦線でもプロレタリアートの、筋金のはいつた闘士にならなければならない。われわれはかならず毛主席の教えにもとづいて、社会主義の時期における階級闘争の長期性、曲折性、複雑性を十分に認識し、階級闘争を絶対に忘れてはならない。われわれはかならず、毛沢東思想でわれわれの頭脳を武装し、階級闘争の観点と階級分析の方法ですべてを観察し、すべてを分析し、すべてに対処しなければなら

ない。まちがったものをみつけたら、それを批判し、毒草をみつけたら、それを根こそぎにし、化けものどものたぐいを見つけたら、それを打ち倒し、かれらがのさばりかえり、騒ぎをおこすのを絶対にするしてはならない。

林彪同志の政治先行についての指示は、社会主義社会にもなお階級と階級闘争が存在するという毛主席の理論にもとづいて出されたものにほかならない。政治とは、階級の階級にたいする闘争である。われわれが政治を先行させるとは、プロレタリアートの政治を先行させ、毛沢東思想を指針とし、階級闘争をカナメとして、プロレタリア思想をおこしブルジョア思想をほろぼす闘争をすすめることである。われわれの軍隊は真空のなかで生活しているのではない。社会の階級闘争は、かならず、さまざまのルートをつうじて軍隊の内部に反映し、われわれすべての人の思想に反映してくるものである。われわれは決して、イデオロギーの領域における階級闘争がわれわれにあたえる影響を見くびってはならない。りっぱな文学・芸術作品、りっぱな文章は、われわれの自覚を高め、われわれの闘志を燃えあがらせることができる。わるい映画、わるい劇、わるい小説、わるい文章は、もしそれを見わけて、しりぞけず、批判しないなら、思想は毒され、しだいに変化して、邪道にふみこんでしまうこととなる。歴史上の経験が立証しているように、いかなる敵がいかに凶悪で、いかなる手くだをもてあそばうとも、それは決して恐ろしいものではない。恐ろしいのは、われわれ自身がマヒし、思想上の武装を解除することである。現在のこの社会主義文化大革命は、もつとも生き生きとした、もつとも実際の階級闘争の教育であり、われわれのすべての幹部と戦士にたいする政治上、思想上の試練でもある。われわれのすべての同志は、高度の政治的責任感ときわめて大きな革命的熱情をもって、現在の文化大革命の情勢に注目し、これに関心をよせ、この偉大な闘争に積極的に参加し、そのなかで試練と教育をうけ、自己を改造し、高めなければならない。

毛沢東時代は、労働者、農民、兵士が理論をつかむ時代である。労働者、農民、兵士大衆は、この社会主義の文化大革命で主力軍としての役割を發揮しつつある。反党的、反社会主義的ないわゆる「学者」「専門家」「教授」たちは、さまざまなベールをまとい、いかにももつたいぶって、わざと奥ぶかい理窟をならべたてているが、われわれをおどしあげることができないし、われわれをまどわすこともできない。われわれには、毛沢東思想という無敵の武器があり、党と社会主義と毛沢東思想に忠実な、火のように熱い心がある。真理はわれわれの手にある。われわれの幹部と戦士の立場は確固としており、旗じるしはあざやかであり、嗅覚はするどく、目はさえており、敵と味方をはつきり見わけ、正しいこととまちがったことをはつきりと区別することができる。われわれは、毛主席の著作を実際に結びつけて学びかつ運用することにつとめ、毛沢東思想でわれわれの頭脳を武装し、修正主義分子とブルジョア分子のいわゆる「権威」を敢然と蔑視し、かれらにたいする盲信を敢然と打破するならば、かならずこれら化けものどもの正体を見やぶり、あばき出し、それを白日のもとに暴露することができる。われわれは毛沢東思想の偉大な赤旗をいつそう高くかかげ、ブルジョアと修正主義の反党的、反社会主義的な黒い糸を断固とりのぞき、社会主義の文化大革命を最後までやりとげようではないか。

## △三家村▽を評す

——『燕山夜話』と『三家村ノート』の反動的本質

姚文元

四月一六日、『前線』と『北京日報』は、「△三家村▽と『燕山夜話』についての批判」と題する資料を発表し、それに編集者のことばをつけくわえた。この「編集者のことば」は、「本誌および本紙は、これまでこれらの文章を発表したが、すぐには批判しなかった。これは誤りである。その原因は、われわれがプロレタリアートの政治による統率を實行せず、また頭のなかにブルジョアジーと封建階級の思想の影響があったため、このきびしいたかひのなかで、立場を見うしなうか、警戒心をうしなうにいたったことにある」とのべている。これはまっかなウソである。『燕山夜話』の筆者は鄧拓<sup>じんとく</sup>であり、『三家村ノート』のほうは鄧拓、廖沫沙<sup>りやもせしや</sup>、吳晗<sup>わいしん</sup>が合資してひらいた殺人宿である。鄧拓は『前線』の編集長を担当するとともに、北京市の思想・文化活動の指導的地位を一手ににぎり、ひとりじめしていた。かれは、△三家村▽の仲間とともに、『前線』『北京日報』『北京晚報』……を反党・反社会主義の道具として、狂気のように反党・反社会主義の右翼日和見主義すなわち修正主義の路線をおしすすめ、党を攻撃する反動階級と右翼日和見主義分子の代弁者をつとめた。これはただ、「警戒心をうしめない」「すぐには批判しなかった」というような問題だろうか。反党・反社会主義の大毒草をこれほど多くばらまきながら、頭のなかにほんのわずかなブルジョア思想の「影響」しかなかったとでもいう

のか。このひどいペテンは徹底的にあげさす必要がある。

△海瑞の免官△にたいする批判がはじまったばかりのころ、鄧拓が正しそうなポーズをとって乗り出してきたのを、人びとはまだおぼえている。あわただしく策をねってから、鄧拓は、向陽生と名をかえて「△海瑞の免官△から『道徳継承論』におよぶ」という長い論文を書き、『北京日報』と『前線』に同時に発表した。この論文は、呉晗を「批判」するポーズをとって呉晗を救おうとするものであり、徹底した反党・反マルクス主義の大毒草である。「北京日報」と『前線』が同時に大きく紙面をさいて呉晗を「批判」する鄧拓の論文をのせたことが、ただ「警戒心をうしなつた」というようなことだけだろうか。「文化・学術戦線」での階級闘争の手をゆるめていた」などというようなことだろうか。そうではない。まったくそうではない。かれらの「警戒性」はひじよにつよいのである。かれらは、党と人民にたいしてすすめる「階級闘争」を、いささかもゆるがせにしてはいなかった。当時、呉晗の問題がおおいかくせないとみると、あわてて鄧拓を乗り出させてニセの「批判」をさせた。だが、長いあいだ悪役をやりつめたものは、立役をやらうとしても、似つかわしくなく、すくなくならず馬脚をあらわした。いま、鄧拓も守り切れなくなつたとみると、またあわてて編集部の名でニセの「批判」をし、あくまで抵抗をこころみ、闘争がいつそう深まるのをさまたげた。しかし、いよいよもって化けきれず、ますます多く馬脚をあらわすこととなつた。「プロレタリアートの政治による統率を實行しなかつた」とか、「すぐには批判しなかつた」とかというものは、すべてごまかしである。それは、鄧拓と△三家村△を「批判」というかくれミノを着て、自分たちがやはり正しい側に立っているかのように装い、それで読者をあざむき、党をあざむこうとするものにはかならない。

このような態度でどうして問題をはつきりさせられるだろうか。どうして「まじめな批判をくりひろげ」られるだろうか。編集者のことばは、呉晗が「再三、再四」、「免職になつた右翼日和見主義分子に助勢した」とのべている。このことは、以前はかくしておこうと思つていたのであるが、早くからかくしきれなくなつて、いま、仕方なしに認めたのである。また、編集者のことばは、廖沫沙は「意識的に党と社会主義と毛沢東思想に反対した主将」である、とのべているが、末尾の部分で鄧拓については、「死人をもちあげ、死人にまなべと、しつこくよびかけた」「封建階級とブルジョアジーの思想を大いに宣伝し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想に反対した」とのべているだけで、かれの反党・反社会主義の活動にはひと言もふれていない。これではとても人びとを納得させることができない。『燕山夜話』一五〇編あまりと『三家村ノート』との多くの毒草は、「死人にまなべ」とよびかけたただけだろうか。封建思想とブルジョア思想を宣伝しただけだろうか。それはただの思想上の誤りで、政治上の問題ではないのだろうか。△三家村△のうちの二家は反党・反社会主義だが、のこりの一家はいちばん多く書いていながら、「死人にまなべとよびかけた」だけだという、それで論理が通るだろうか。それは、大げさにもち出してそつとおろし、ニセの批判をしておいて、実際には人の目をごまかそうとするものである。これでは、「批判」劇を演じてみせて、党中央の指示にさからおうとする以外のなにものでもないことは、きわめてあきらかではないだろうか。

この編集者のことばに合わせてまとめられた『燕山夜話』は「いったい何をふいちようしたか」という文章は、二面にわたる長いものだが、これもするどい政治上の問題をおおいかくしている。そのいくつかの部分の見出しをあげてみると、「党の百花齊放、百家争鳴の方針をねじ曲げ、ブルジョア思想をはらんさせよと主張」

「封建社会制度を全面的に美化」「封建時代の古人のしかばねをかりて、ブルジョアシーの魂をよみがえらせる」「搾取階級の没落的的人生哲学を宣伝する」「むかしのことをもち出して現在を風刺し、遠回りに攻撃する」などとなっている。見出しは編集者の傾向と判断をしめすものである。このまとめ方は、『燕山夜話』は海瑞の免官とは性質がちがいが、党中央と毛主席への反対、右翼日和見主義分子への支持という内容をもっていないか、もっていてもきわめてすくない、と側面から読者に訴えている。百花齊放、百家争鳴の方針のねじ曲げという見出しを人目につく第一の部分にかかげ、「むかしのことをもち出して現在を風刺する」という見出しを最後にならべ、わずかに数語でさらりとえがき、申し訳すいどに、なんとか二カ条をかきあつめているが、目のきくものなら、ひと目で編集者の苦心のあとがわかる。

われわれがしらべてみたところ、まったく違っていた。党中央と毛主席を実に悪どく中傷し、右翼日和見主義分子を支持し、綏路線と社会主義の事業を攻撃した多くの政治的発言は、ここにはとり入れられていないか、けずりとられている。むかしのことをもち出して現在を風刺し、党と社会主義に反対した、あきらかに最もはげしい毒をふくんだ発言は、わざと重大なるをさけて二次的なものを取りあげるようにして他の部分にならべている。『燕山夜話』が全国にあたえた悪影響については、一言もふれていない。それとは反対に、問題の急所をはずれた内容のものをさかんにならべ立てて、いかにももつともらしくみせかけ、大きな問題を小さな問題にかえ、ごまかしの手をつかって逃げのびようとしている。とりわけ、この時期に鄧拓、呉晗、廖沫沙の書いた、党を攻撃するおびただしい文章が、それぞれにつながりのない「個人経営」の産物ではなくて、へ三家村✓合名会社から放出されたものであり、指揮者もあれば、計画もあり、とくにはつきりと呼応したものであるという事実

がかくされている。呉晗は急先鋒であり、廖沫沙はすぐそのあとにつづいたが、三名の將軍のうちの真の「主将」、すなわちへ三家村✓殺人宿の番頭であり頭目であったのは鄧拓である。

毛沢東同志は、「われわれは真理を堅持しなければならぬし、また真理は旗幟鮮明でなければならぬし。」（『晋綏日報の編集部の人たちにたいする談話』）とわれわれにおしえている。するどい複雑な階級闘争のなかでは、かならずさまざまなニセものがあらわれる。このさまざまなニセものにあざむかれたいためには、毛沢東思想の革命の旗じるしをはつきりと高くかかげ、原則を堅持し、真理を堅持し、すこしもあまいにせず、すこしも言葉をにごさずに、事物の本質をあばき出す以外にない。『前線』と『北京日報』が、とつぜん、『燕山夜話』と『三家村ノート』の問題をとりあげ、しかも真相をおおいかくしている以上、革命的なすべての人びとは、当然、その反動的な正体を洗いざらいはつきりさせる責任がある。『燕山夜話』と『三家村ノート』の内容はきわめて雑多であるが、ひとたび分析すれば、そこに反党・反社会主義の黒い糸がちらぬいているのをすぐ見とることができる。この黒い糸は、海瑞、皇帝をのしる✓海瑞の免官✓をずっとつらぬいてきたものであり、ここ数年、中国の政治的空氣に暗雲をまきおこしてきた。いまこそ、へ三家村✓というこの大殺人宿の内幕をさらにあばき出すときである。

### 『燕山夜話』と『三家村ノート』はどのようにつけて幕をあけたか

『燕山夜話』と『三家村ノート』は、海瑞の免官✓にすぐつづいて幕をあけたものである。それは、へ三家

村で周到に策をねりあげたうえで、目的もあれば、計画もあり、組織もある反党・反社会主義の大進攻であった。日程表をひと目みれば、すぐただならぬ深い印象をうける。

一九六一年一月、公海瑞の免官が『北京文芸』に発表された。いま、この芝居の反動的本質はみればみるほど明らかである。この芝居は、廬山会議には先をむけ、毛沢東同志を先頭とする党中央にねらいをつけ、廬山会議の決定をくつがえそうとするものであった。この芝居で「海青天」、つまり右翼日和見主義者の「免官」は「不当」であり、右翼日和見主義者は当然復帰して「朝政」をとるべきだとわめきたて、その修正主義的綱領をつらぬこうとしたのである。右翼日和見主義者のかえり咲きを支持して、資本主義を復活させること——これこそ公海瑞の免官の作者が当時いだいていた切実な気持ちであった。それはまた、公三家村の「兄弟」たちが当時いだいていた共通の気持ちでもあった。

この脚本は、発表されるとすぐ、一部の人がともてはやされ、支持された。公三家村の兄弟たちは、先鋒が出馬して勝利をおさめたと思ひ、おどりがあつてよろこび、有頂天になった。一九六一年一月二日、廖沫沙は『北京晚報』紙上で、「師走の鼓が鳴れば、春の草がもえ出る」「春ともなれば大いに腕をふるいはじめなければならぬ」とそでをまくりあげた。これが公三家村の早春の空模様である。つづいて二月一日、廖沫沙はおおつばらに呉晗に書簡をおくつて、かれが、「人びとをいよいよふるい立たせるため」「門をつき破つておどり出した」ことに「祝意」をしめすとともに、「『歴史』と『演劇』は分業しながらも協力すべきだ」と提案した。二月八日、呉晗は、先鋒としての資格でかれの「兄貴分」に返書をおくり、「貴兄にも提案したい。あなたはなぜ門をつき破つておどり出さないのか」とのべ、「あなたはわたしが門をつき破つておどり出したとい

われたが、そのものずばりだ。わたしは門をつき破つておどり出したのだ。この門はどうしてもつき破らなければならぬ」と胸をたたいてみせた。なんと攻撃的なポーズではないか。なんと荒い鼻息ではないか。まことに一戦をまじえようとのかまえである。攻撃の時機はきた。公海瑞の免官を送り出したのち、師走の鼓が鳴りひびいたからには、かれら一味のものが「大いに腕をふるう」ことであろう——当時、かれはそう考えていたのである。

一九六一年二月二五日、つまり「この門はどうしてもつき破らなければならない」と叫んだときから一週間後、呉晗は「『神仙会』と百家争鳴」という文章のなかで、「基層組織にいたるまで各段階の神仙会をひらけ」「なぜなら、基層組織の人びとはみな実際活動にたずさわつており、実地にふれているから、問題はいつそう具体的で、いつそう顕著で、いつそう集中しているからだ」と叫んだ。かれは、基層組織のなかの「腹にいちもつある」連中に行動をおこせと叫んだ。かれは「百家争鳴の前進途上にある障害をとりのぞけ」と叫び、さらに「四〇余年も学問をつづけ、一〇年、二〇年も大学の講壇に立ち、そのうえ何冊かの書物も書いたのだから、まづ知識人といつてさしつかえあるまい」と得意になつて自分のことをふいちようした。つまり、自分には元手もあるし、黒幕のうしろだてもあるのだから、いまこそ、自分たち反共のブルジョア知識人が登場して大いにいばりちらすときだと、かれはそう考えていたのである。

このドラと太鼓がしきりに鳴りひびき、公海瑞の免官のまきおこす黒雲が「熱っぽい」空気をかもし出すなかで、呉晗の手にする「露はらい」の棒が「ひとふり」されたあと、息つく間もなく一九六一年三月、主将が登場した。「燕山夜話」が「友人たちの提案にこたえ」、「門をつき破つておどり出した」のである。鄧拓は、

「人にひつばられて馬にのせられた」といつているが、それはまちがいだ。「人に迎えられて馬にのつた」と改めるべきである。先鋒が道をひらき、「兄弟分」がムチをとっているのだ。主將たるもの、馬にのるのがあたりまえではないか。

『三家村ノート』の登場は、呉晗の公海瑞の免官の序言にきびすを接している。一九六一年八月、国内の反動階級が攻撃の手をつよめている矢先に、呉晗は、脚本のまえがきのなかで、「この芝居は、剛直でおもねらず、強圧に屈せず、失敗してももう一度やるという、この海瑞のつよい意志に重点をおいて書いた」ととくに指摘し、「官」を「免」せられた右翼日和見主義者がふたたび党に攻撃をくわえるようさかんに激励し、支持した。かれは序言のなかで、自分の「友人」がいかに策をねってくれたかを得意になつてのべるとともに、「瓦を投げて玉を引きます」ように、多くの毒草を「引き」出したいと声明した。ついで一九六一年一月五日には、『燕山夜話』に「なにごとにも心をよせる」という文章が発表され、そのなかで、「風の音、雨の音、書を読む声、すべての声に耳を傾け、家の事、国の事、天下の事、なにごとにも心をよせる」という対句が引用された。これは、「当時の東林党の面々の政治上の抱負をあますところなく示したものだ」「この対句の意味するところはまことに深いものがある」と、ひじょうに激高してのべている。東林党というのは、明代の地主階級内部の「反対派」である。鄧拓がこれほどまでに「東林党の面々の政治上の抱負」をもてはやしたのは、その心のうちで、「反対派」に共鳴したからである。鄧拓は、「風の音、雨の音」の絶えまなく、よこしまな風雨のおだやかならぬいまこそ、「政治上の抱負」をさらにひろげ、「なにごとにも心をよせて」、いっそう公然と党と社会主義に攻撃をくわえるべきだ、と考えたのである。わずか数日後、一九六一年一月一日に出版された、鄧拓が

編集長をつとめる『前線』は、かねて人目をさけていた地下工場を公開的な合名会社にかえて、おおつびらにへ三家村の看板をあげ、三家の火力を集中して、はじめの教号に「『偉大な空言』」その他、党中央の指導にきわめて悪い攻撃をくわえる砲弾を発射した。

『燕山夜話』と『三家村ノート』の登場は、公海瑞の免官を送り出したのち、段取りを追い、組織をもち、指揮にしたがって党にひきつづきくわえた攻撃をしめすものである。この殺人宿の内幕を洗いさらいあばき出すには、「三家」の作品をしつかりと結びつけてみなければならぬ。

### 黒い糸とつよいしなな風

鄧拓は、『燕山夜話』の題目の由来について、「日ごろ考えたり、見たり、聞いたりしたものに問題があると感じると、すぐ題目が生まれる」とみずから語っている。指導的な地位にあった鄧拓が「見た」のはどんなものだっただろうか。そのかれが「聞いた」のはだれの話だっただろうか。かれはここで、『燕山夜話』のすべては当面の実生活のなかでかれが不満をもっていた「問題」にねらいをつけて書いたものである、反党・反社会主義の悪い内容のものにはかれが「聞いた」と手をつまみくわえてまとめあげたものもいくつもある、ともらしている。これらの文章の出発点とテーマは、すべて当面の政治生活での重大な問題であつて、つよい現実性をもち、なにも「古人を美化した」というような一般的なものではない。筆者のしめしたこの手がかりをたぐっていけば、『燕山夜話』と『三家村ノート』には公海瑞、皇帝をのしる公海瑞の免官をずっとつらぬいてきた反



党・反人民・反社会主義の黒い糸、つまり、毛沢東同志を先頭とする党中央を中傷、攻撃し、党の総路線を攻撃し、極力「官」を「免」ぜられた右翼日和見主義分子の原決定取消しのための進攻を支持し、封建勢力と資本主義勢力の気がいじみた進攻を支持する反党・反人民・反社会主義の黒い糸がたらぬいてるのを、はっきりと見てとることができる。この黒い糸は、国内、国外での階級闘争の情勢の変化に応じ、「考えたり、見たり、聞いたりした」「問題」のちがいに応じて、ちがった攻撃の方向をえらび、「分業・協力」し、互いに呼応し、各方面から歩調をあわせて、つぎつぎに黒い波をまきおこし、つぎつぎによこしまな風を吹きおこった。

一九六一年一月、党中央は第八期中央委員会第九回総会をひらいた。総会は、「過去三年間にわが国がおさめた偉大な成果は、党の社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社が中国の実状に適していることを物語っている」、「農業生産が二年連続のひどい自然災害にみまわれたのにかんがみ、一九六一年には全国的に力を結集して農業戦線を強化しなければならない」と指摘した。総会の公報は、「……人口の数パーセントをしめるごくわずかな、十分に改造されていない地主階級分子とブルジョア分子……かれらはつねに復活をねらっている。かれらは、自然災害で生じた困難と基層組織の活動でのいくつかの欠点を利用して破壊活動をおこなっている」(「中国共産党第八期中央委員会第九回総会の公報」とするどく指摘している。かれらは、反党・反社会主義の黒い風をまきおこし、やつきになって党と人民の社会主義事業を誹謗、中傷し、党中央をのろい、党の総路線をくつがえそうと夢みた。この総会の直後に幕をあけた『燕山夜話』は、復活をねらうブルジョア分子や地主階級分子の政治的奉仕するために、ひどい自然災害がもたらしたいくつかの経済的困難につけこんで、総路線を攻撃し地主階級とブルジョア分子の復活の動きを支持するよこしまな風を集中的にまきおこした。

一九六一年三月二六日、鄧拓は「『雑家』歓迎」のスローガンを出した。「雑家」とはどんな人間のことだろう。かれに言わせると、「広い知識をもっていて」「何でもごたませに頭につめこんでいる」人間のことである。かれはまた、「ふるい時代の有名な学者は、程度の差こそあれみな雑家といつてよい」とも言っている。かれは、「いま、『雑家』のもつ広い知識がさまざまな指導活動と学術研究にとって重要性のあることをみとめないなら、それはわれわれの大きな損失になるだろう」と、党に警告した。「指導活動」といつている点に注意してほしい。これが急所である。さきにのべた鄧拓のことばからすると、この「雑家」というのは、十分に改造されていないブルジョア分子、地主階級分子とこれらの階級の知識分子であり、一握りの政治的な素性のはつきりしない人物であり、地主階級とブルジョア分子の「学者」連といった反動的な人物であることが、ひじょうにはつきりする。鄧拓がその文章のなかで守り神としてかつき出した帝王、将相、三教・九流、封建的頑迷分子から占い師にいたるこれら「ごたませ」の死人は、すべて「雑家」のはこらのみたましろである。かれらは、自分の「知識」を元手に、必死になつてもぐりこむか、はいあがつてきて、各級の指導的地位を乗つとり、プロレタリアート独裁の性質をかえようとしている。鄧拓が「雑家」の「指導活動」にたいする「重要性」をわれわれに重視せよといったのは、党にむかつて、かれらのために門をひらけ、資本主義の道をあゆむ「雑家」に「さまざまな指導活動」の指導権をうばいとらせよ、と要求したわけである。また、「学術研究」、つまり学界、思想界の指導権を手にいれるのは、資本主義復活のための世論の地下をつくるためである。かれじしんにしてからが、「雑家」の第一人者をもって自任していた。当時、一部のブルジョア分子は、資本主義的搾取をすすめるうえでのかれらの「広い知識」を「指導部」に「重視」してもらいたいと、うずうずしていたのではなかっただろう。

か。かれらは自分たちのそうした「知識」で社会主義企業を資本主義企業にかえようと考えていたのではなかつただろうか。「『雑家』歓迎」というこのスローガンは、へ三家村が搾取階級による指導権のつとりを支持するために出したものであって、たんなる空言とみなしてはならない。はたせるかな、へ三家村内の「雑家」たちは、いくつかの「指導活動」を手中におさめたではないか。

一九六一年四月二三日、「とぎすよりはみちびく方がよい」という文章のなかで、鄧拓は、「すべての事物について」「すすんでみちびき、順調に発展させる」必要があるとかさねて要求し、もしも「事物の運動と発展の道をとぎす」なら、「かならず失敗する」とのべた。

「すべての事物」、つまり反党・反社会主義の反動的な暗黒の事物をふくむ「すべての事物」に注意してほしい。われわれが社会主義の道を堅持しようとするれば、かならず資本主義復活の道をとぎさなければならぬ。われわれがすべての革命の新しい事物を支持しようとするれば、かならず反革命のくされはてた事物をうちくださなければならぬ。「うちやぶらなければ立てられず、せきとめなければ流れず、とどめなければ進められない」。革命の奔流のゆく手をひろくには、反動の逆流をせきとめなければならぬ。ところが、鄧拓は、反社会主義の事物をもふくむ「すべての事物」にたいしても、「道をとぎす」な、「順調に発展させ」よと、われわれに要求した。これはあきらかに、われわれにたいして、ブルジョア的自由化を実現せよ、折から吹きすすんでいく「個人経営の風」「三自一包の風」……に屈伏せよと要求しているのでなくてなんであろう。「みちびく」とは道をつけてやるという意味であり、かれらは資本主義勢力のための「道づくりの先鋒」をもって自任しているのである。社会主義はやがて「失敗」し、資本主義の復活をねらう黒い風は「かならず勝利」するから、かれら

は資本主義を「発展」させる反動勢力に公然と身を売ることができるとへ三家村はそういう見込みをたてていたのである。

一九六一年四月三〇日、「労働力を大切にする学説」という文章のなかで、鄧拓は、われわれが「労働力を大切にしない」と露骨に攻撃して、プロレタリアート独裁と地主階級独裁を同列に論じ、「早くも春秋戦国時代とその前後の時代に」、搾取階級は「自分たちの支配の経験をつうじて」「労働力の消長にかんするいくつかの客観的法則をみつけれ出し」「さまざまな基本建設に必要な労働力」の限度を算出して、などのべた。鄧拓は、「われわれは古人の経験のなかから新しいヒントをつかみ、各分野でつとめて労働力を大切にしよう、いっそう心をそそぐべきである」と要求した。だれも知っているように、われわれはもつとも労働力を大切にしており、中国共産党のすべての活動は、広はん人民の根本的利益から出発し、ひたすら人民に奉仕している。ところが、歴史上のすべての奴隷主階級と地主階級は、勤労人民にあくことなく、とめどない、むごい搾取をくわえることしか知らず、つぎつぎに、奴隷と農民の大きな蜂起をもえあがらせるものであって、そうしたかれらに、「労働力の消長」にかんする「客観的法則」がどうしてつかめるだろうか。これは、当時、自然災害によつてもたらされたわれわれの一時的な困難につけこんで、総路線と大躍進は「労働力を大切にしないものだ」と中傷し、われわれにむかつて、大いに意気込み、つねに高い目標をめざし、多く、早く、りっぱに、むだなく社会主義を建設する総路線を放棄せよ、大々的な農業発展を放棄せよ、奮起興国、自力更生の革命的な方針の遂行を放棄せよ、地主階級のいわゆる「支配の経験」によつてプロレタリアート独裁を崩壊させよと要求するものにはかならない。つまり、きみたちが自力更生をやるのは「背のび」であつて、「あまりにも無理」だ、はやく馬か

らおりろ、いそいで投げだせ、とにかく地主階級の「雑家」たちのふるいやり方であることをはこべ、というのである。これは、あきらかにアメリカ帝國主義と現代修正主義の悪どい攻撃に呼応したものではないだろうか。もしもこの路線にしたがつてことをはこんだら、われわれは大慶油田も大衆生産大隊も原子爆弾ももてなかつたばかりでなく、帝國主義の植民地になりさがっていただろう。

この文章の発表された前後、鄧拓がさかんにフルシチョフ修正主義グループにまなべと宣伝したのは、決して偶然ではない。かれは、「友とまじわり客をもてなす道」という文章のなかで、「自分の国よりも強い」国に「まなび」それと「団結」しなければならぬ、そして「友が自分よりも強いことをよろこぶ必要がある」とすすめた。また、「三から万へ」という文章では、「もしも自分を人なみすぐれていると思ひこみ、ひと通りはたやすくのみこめるとみれば、恩師を足げにするようでは、なにも学びとれはしない」などと悪態をついた。これは、われわれの現代修正主義反対闘争に悪どい攻撃をくわえて、修正主義を門内に招き入れよ、狼を都屋にひき入れよと要求するものである。われわれは、社会主義建設に有利な、世界のすべての経験と教訓を学ばなければならぬが、修正主義に学ぶことは絶対にできない。われわれは、あらゆる革命事業の大発展をころから歓迎するが、修正主義を歓迎することは絶対にできない。鄧拓の一連のあてこすりは、右翼日和見主義分子の口ぶりとまったく同様、党の社会主義建設の路線を「無理おし」と中傷するものであり、ソ連修正主義グループのゆき方を「学んで」中国で修正主義を実行する以外に「活路」はない、というのである。

このよこしまな風をまきおこすにあたって、へ三家村は、一方では化けものどもの登場にかっさいを送つてさかんに声援し、大いに道をつけ、内外から呼応するとともに、他方では、国内、国外の反動派、現代修正主義

者と歩調をあわせて、党の社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社に悪どい攻撃をくわえ、現代修正主義を美しくかざりたて、右翼日和見主義分子がふたたび権力の座にもどるように世論をつくり出そうとした。

一九六一年の六月から七月にかけて、へ三家村はまたしてもよこしまな大風をまきおこした。七月一日は中国共産党創立四〇周年であった。毛沢東同志を先頭とする偉大な、光栄ある、正しい中国共産党は、総路線の赤旗を高くかかげ、国内、国外の反動派とのするどいたたかい、きびしい自然災害とのたたかいのなかで、ひきつづき社会主義の道を勝利のうちに前進するよう、中国人民をみちびいていた。このとき、国内の反動勢力と、「官」を「免」せられたが失敗に甘んじない右翼日和見主義者は、かれらにたいする廬山会議の批判と解放後数回にわたる重大な政治闘争の成果を否定しようとして、一段と「原決定取消しの風」を吹きつのでさせた。このとき、へ三家村の「兄弟」たちは、右翼日和見主義分子支持の毒矢をどつと党中央にそいいたのである。

一九六一年六月七日、吳晗は、于謙の記念に名を借りた暗い文章のなかで、またしても「ぶこく」事件をとりあげ、「罷免」された于謙をさかんにもちあげた。かれは、于謙を「人となり剛直で」「うまれつき素朴であり」「いつまでもその名は朽ちない」とのべ、于謙の「名譽が回復され」「于謙の政敵があいついで失敗した」ことをとくとりあげるとともに、さらに于謙が「兵部尚書（国防部長）」に任命されていたという注釈をくわえた。「名譽回復」はこんにちのわれわれの用語であり、皇帝がこうした用語をつかうなどということはまったくありえない。吳晗は、プロレタリアートの革命派がまもなく「あいついで失敗する」、やがて右翼日和見主義者が「名譽を回復」される、というかれの気持ちにこれを託してもらはしたにすぎない。

一九六一年六月二二日、吳晗が于謙事件をとりあげたのにつづいて、鄧拓がまた「陳絳と王耿の事件」という

文章を発表した。この文章は、あまりに悪どく、むき出しであるため、筆者も気おくれして、『燕山夜話』の単行本にはまったくおさめる勇気がなかった。われわれは、『燕山夜話』をのせた『北京晩報』からこれを見つけだしたのである。筆者は、この「故実」は「人びとに考えのいとぐちをつけさせる」ものだから、古書の山のなかからとり出してきたのだ、とのべている。文章は、「故意に誇張し、ねつ造された」「事件」を陰険いんけんの手法でのべたものだが、最後のくだりで、「明肅太后の治世に、宋朝政府の官僚政治は腐敗の一途をたどり、上部には行政にあたる有能な宰相とまじめな責任感のある属僚がおらず、下部では地方官が思いのままにのさばりかえっていた」、そのため、「この事件」の「拡大と複雑化」がもたらされたのだ、と画竜点睛の一節を書きそえている。これは、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子の反革命的な口調で、わが党に悪どい中傷をくわえ、「明肅太后」や「宰相」への攻撃に名を借りてわが党中央を悪どくのしり、「思いのままにのさばりかえっている」「下部の官吏」にことよせて党の各級幹部を悪どくのしり、右翼日和見主義分子やその他の反党分子のためにその無実を訴えたものである。ひいては「拡大化」というような現代の用語まで口にしたのである。いったい、どのような「考えのいとぐち」を「つけさせ」ようとしたのだろうか。それは、右翼日和見主義分子やその他の反党分子にたいする「原決定取消し」のための「考えのいとぐち」をつけさせようとしたのではないだろうか。それは化けものどもに社会主義とプロレタリアート独裁を攻撃するための「考えのいとぐち」をつけさせようとしたのではないだろうか。とりわけ意味深長なのは、鄧拓が「原決定取消し」の期待をある「有能な宰相」の登場による指導部の奪取にかけていた点である。どのような役者の登場をよびかけていたかは、目のきくものにはすぐわかる。これが、△三家村△の主将の口うらである。これを単行本におさめなかつたことは「やぶへび」であり、いよいよ人の注目をひくだけである。

おなじころ、鄧拓はまた、「二つの寺の興廢」という文章のなかで、「二つの寺のうち、ひとつは興隆し、ひとつは荒廢すること大いに「感慨」をもよおした。ひとつの寺は参詣者が多く、「遠近に名を知られている」のに、いまひとつの寺は「荒廢」し、「ずっとかえりみるものもない」。こういっても、人にわかつてもらえないのは困るから、かれはとくに、「これとよく似たほかのことがら」におしおよぼして考えてほしい、とわれわれに要求している。ここでさしているのは、われわれが右翼日和見主義分子にあまりにも冷淡であり、もはや参詣にゆくものもないということである。鄧拓は、政治の舞台からころがり落ちた反党・反社会主義のドロぼとけ、党と人民から徹底的に捨てさられた右翼日和見主義者やその他の反党分子の「ずっとかえりみるものもない」というその境遇に強い不満をしめし、かれらをもう一度「重視」せよ、「破損」した仏像をもういちどまつりあげよと、党に要求しているのである。

ついで吳晗は△海瑞の免官△のまえがきのなかで、「海瑞は、罷免されたが、屈服もしなければ、落胆もしなかった」といつそう露骨にさげび、「失敗におびえず、失敗してももう一度やるつよい意志」をもたねばならぬ、とわめき立てた。これは、△三家村△の当時の共通の叫びであって、けつして孤立した出来事ではない。かれらは、右翼日和見主義分子に「もう一度やれ」と励ましたばかりでなく、自分じしんもいよいよ張りきって「腕をふるった」のである。

一九六二年七月二五日、△三家村△から「『健忘症』の専門治療」というきわめて悪どい反共の文章が出された。この文章は、党の責任ある地位にある同志が「健忘症」にかかっており、「見たものもすぐに忘れるし、口

にしたこともすぐに忘れる」、「言ったことを否定し」、「言ったことは信用できない」、そのうえ「喜怒哀楽もつねならぬ」ので、「特製の棍棒で患者の頭をなぐりつけ」、「人事不省」におちいらせる」必要がある、と毒づいた。これは、党中央を敵視、中傷する右翼日和見主義者の言葉とそっくりであるばかりか、それこそ、プロレタリア革命戦士を一撃のもとになぐり殺そうとするものである。なんと悪どさだろう。かれらは、革命家をなぐり殺し、ぶちのめして、修正主義を登場させようと思いつめていたのではないか。この文章は、かれらが党にたいして骨の髄まで階級的なにくしみにみちていることを赤裸々にさらけ出したものであり、完全に地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子の立場からわが党を攻撃しているのである。

上にあげた一連の事実は、今海瑞の免官が呉晗ひとりの政治的態度をしめすだけでなく、へ三家村をグルーブが「官」を「免」せられた右翼日和見主義分子の反党・反社会主義的政治活動を支持する前奏曲でもあったことを、はっきりと立証している。このグルーブのひとにぎりのものは、反党・反社会主義分子が党と国家の権力をうばいとることに自分ののぞみをかけて、逆流をあおりたてた。しかし、「蚍蜉が大樹を撼らうとするのは、笑うべき身のほど知らず」である。このひとにぎりの反党・反社会主義分子の中傷、攻撃は、党の偉大な輝きをすこしもそこなうことができず、自分の罪惡にみちた正体をさらけ出して、人民の怒りを買ひ、党と人民から見捨てられるだけのことである。

「三家村ノート」の幕あけから一九六二年三月の第二期全国人民代表大会第三回会議にいたる時期には、へ三家村の攻撃が狂気の程度に達したといつてよい。このとき、まず国際的には、帝国主義、各国反動派、現代修正主義者がこれまでにまましてさわがしい反中国の大合唱をまきおこした。一九六一年一〇月にひらかれたソ連

共産党第二回大会で、ソ連共産党指導部は、かれら自身がソ連共産党第二〇回大会からしだいに発展させてきた修正主義路線を完全な体系に仕上げ、国際共産主義運動の分裂と資本主義の復活という修正主義的政治路線をさらにおしすすめた。国内では、復活をねらう反動階級とその政治的代理人が、われわれが三年連続のきびしい自然災害にみまわれているのにつけこんで、政治、経済、文化の領域でいよいよ気ががいがい全面的な攻撃をおこし、われわれが「調整、強化、充実、向上」の八字方針をおしすすめていたときをねらって党の指導をくつがえし、プロレタリアート独裁をくつがえそうと夢みた。

へ三家村のこの時期の情勢判断をもつともよくしめす文章がふたつある。ひとつは一九六二年一月一日の呉晗の「波について」である。かれは、熱狂的な興奮をおさえかねて、「この半年あまりのあいだに」社会におしよせた「波」に熱烈な歓呼の声をおこった。かれは、「この波頭はまことに大きい」とよろこびの声をあげ、党の指導とプロレタリアート独裁にうちよせる逆流を「波」の成果として大いにふいちようした。「波頭」は「ますます大きくなる」だろうというのが、そのこの情勢にたいするかれの見通しであった。利欲に目がくらんだ呉晗は、かれらの一味が勝利をおさめ、修正主義の逆流がやがて主流になるものと、判断をくだした。それから間もなく、二月四日には、鄧拓が、あえて単行本にはおさめる勇氣のなかった「ことしの春節」という文章のなかで、「北風がもたらす厳寒の候はやがて終わりをづけ、これにかわるのは暖かい東の風である。大地はまもなく雪どけを迎えよう」といつそう露骨に書いた。「雪どけ」というのは、フルシチョフ修正主義グループがスターリン反対のさいにつかつた徹頭徹尾の反革命の用語ではなかつただろうか。利欲に目がくらんだこの連中の見通しといえ、一九六二年には社会主義の新中国が「やがて終わりをづけ」、プロレタリアート独裁が反社会主義

の逆「波」におし倒され、「これにかわる」のは右翼日和見主義者つまり修正主義者の天下である。へ三家村の面々はいよいよ勢力をえて、思いのままにのさばりかえることができる、というものであった。同志諸君、へ三家村が中国に修正主義の「雪どけ」の局面があらわれるのをいかに待望していたかを見てほしい。

こうした情勢判断のもとに、へ三家村は気がいじみた全面的な攻撃をおこした。

一九六一年一月二〇日、鄧拓は『三家村ノート』に「偉大な空言」を発表した。かれは、ある子供のつくった詩を批判するとうかたちで、「東風はわれわれの恩人、西風はわれわれの敵」というのは「空言」であり、「紋切り型の文章」であり、「使いふるした歌い文句」であり、また「手まえミソのうぬばれ」であると、さんざんあてこすりの悪態をついた。これは、「東風が西風を圧倒する」というマルクス・レーニン主義の科学的断定を、だれははかることもなく「空言」とのしつたものである。鄧拓は、「この種の偉大な空言はある特殊なばあいにはさけられない」とのべているが、これは、子供のつくった詩をのしつていけるのではなく、「特殊なばあい」、つまり国際、国内の階級闘争でわが党がたたかいてすすむ、大衆を教育するうえでの思想的武器をのしつていけるのだということ、読者に暗示したのである。鄧拓のねらいはどこにあるのか。それは、われわれの前進をみちびく偉大な毛沢東思想を「空言」と毒づくことにあり、われわれに政治生活のなから毛沢東思想を抹殺させ、マルクス・レーニン主義の路線をすてさせようとすることにある。あろうことか、かれは、わが党にむかって、「しゃべるのをへらせ、しゃべる必要のあるときには休めよ」という大それた要求をつきつけた。毛沢東思想が「休」んだら、修正主義思想が大いにはんらんできるではないか。かれらは狂気のように毛沢東思想をのしつたが、それは、毛沢東思想をすこしもそごえないばかりか、反対に、毛沢東思想こそあら

ゆる化けものどもをふるえあがらせる無限の革命的威力をそなえた思想的武器であることをいつそうはつきりさせたのである。

これとびつたり歩調をあわせて、へ三家村は、毛沢東思想を攻撃し、革命派を中傷する多くの文章をつぎつぎに発表した。『燕山夜話』に出た「手を放せば下は地面だ」という文章は、党にたいして社会主義建設の総路線を「手放せ」と要求するのが眼目であり、あくまでつかんで手を放さないものは「めくら」で、「みずから苦勞をもとめる」ものだと風刺している。かれは、「心配せずに大胆に手を放して」、みずからころべ、「地面」つまり資本主義の土地にころべ、と党に要求している。一月二五日には、廖沫沙が「『孔子のすぐれたところ』はどこにある」「鬼をおそれる『みやびのざれ言』」という二つの文章を同時に発表した。前者は、孔子をもちあげるかたちで、「孔子はなかなか『民主』的な思想の持ち主であり、人びとが自分の学説を批判するのをよろこんだ」とのべている。言外の意味は、ブルジョア「民主主義」を発揚して、反動分子に毛沢東思想を攻撃させよ、と党に要求しているのである。後者は、にくしみにもえた言葉で毛沢東思想を中傷し、革命的なマルクス・レーニン主義者は「さかんに大ぶろしきをひろげ」「口先では鬼をおそれないといながら、実際には鬼がおそろしくてたまらない人間だ」と悪態をつき、かれらに「さんざん醜態を演じ」させようとしている。だれも知っているように、毛沢東思想で教育された偉大な中国共産党と偉大な中国人民は、あらゆる妖怪変化をおそれないばかりか、世界のあらゆる妖怪変化をこっぴどみに粉砕する決意であり、「ただ虎豹を驅う英雄のみあり、まして熊羆を怖るる豪傑はなし」という詩句は、偉大な中国人民の何ものもおそれぬ雄々しい風貌を要約したものである。この英雄的な気概はすべてのよこしまなものを圧倒することができる。廖沫沙は、こともあろう

に「鬼をおそれる物語」を一本にまとめようとしたが、これは、あきらかに国内、国外の反動派、現代修正主義者と歩調をあわせて、鬼をおそれない中国人民を戯画化し、党を戯画化し、毛沢東思想を堅持する革命派を戯画化するものではないだろうか。

この二つの文章が発表された翌日、『燕山夜話』はさっそく「外国の寓話ふたつ」をのせて、いわゆる「大ぶろしき」をさらに攻撃した。この文章は、「いまも、こんなホラ吹きにはいつ、どこでもお目にかかれる」などとのべ、「ホラ吹きのペテン師を決してやすやすとのがしはしない」と毒づいた。革命をやるうというのか、胸に祖国をおもい目を世界にむけようというのか、自力更生で困難を克服しようというのか——それらはすべて「大ぶろしき」であり、「ホラ吹き」であって、へ三家村へはこれらの人びとと決着をつけようというのである。この文章を単行本におさめるとき、筆者は「困難は克服できないだけでなく、逆にますますふえてゆき、いよいよ重大なものとなる」という文句をけずった。わが党が困難を克服するためにとつた自力更生の方針を、かれらがいかに悪意をこめてあざ笑ったかを見てほしい。かれらは、困難が「ますますふえてゆく」などと考えていたのである。それから間もなく、呉晗はまたしても「趙括と馬謖」のなかで、いわゆる「派手に立ちまわって人気をとる」「長広舌をふるう」という二つの物語をとりあげ、むかしのことをもち出して現在を風刺する手法で、いわゆる「失敗の経験」、「自己をそこない、人をそこない、国をあやまらせた教訓」を「今日、もう一度まなびなおせ」とわれわれをたしなめた。呉晗は、あきらかに、偉大な中国人民は「ひっくりかえった」、総路線はすでに「失敗」した、右翼日和見主義者がまもなく登場する、と妄想していたのである。鄧拓の「『偉大な空言』」から吹きはじめたこの大黒風は、右翼日和見主義者の登場をうながす声と完全に結びついたのである。

わが国の社会主義建設が活気にみちて新しい高まりにはいつたいま、これらの文章をもう一度よみなおしてみると、それはただ、反党・反社会主義の「豪傑連」が永遠に人民大衆の偉大な力をみてとれないことを、われわれに告げるだけである。政治情勢の判断にかけては、かれらはめくらよりもさらに目がみえない。

同志諸君、友人諸君。この鄧拓の文章を中心とする中傷と攻撃は、短い期間に、これほど目標が集中し、これほど言葉が一致していたのである。これは計画的に組織され、計画的に呼応したのではないだろうか。かれらの反党・反社会主義はなんと気がいじみていることだろうか。われわれはこれに激しい義憤を感じないでいられるだろうか。徹底的にかれらをたたきつぶさないでいられるだろうか。

つづいて「門をつき破っておどり出した」一連の文章は、そのほこ先をいつそう露骨に毛沢東同志を先頭とする党中央にむけ、攻撃の重点を政治問題から組織問題に移し、その悪らつさと狂気の程度はまれにみるものであった。

一九六二年二月二日、鄧拓は「知謀はたよりになるか」という文章のなかで、「皇帝」は「ひろく人びとの意見をまとめる」べきである、とのべた。かれは、「かならずしも自分で計画をたてる必要はない」ととくに強調し、「自分で計画をたてれば、おべつか使いがそれにつけこんで取り入るようになる」と悪意をこめてのべた。これは、指導的幹部に下部の意見を謙虚に聞けといっているのでは決してなく、党中央にかれらの支持する例の修正主義路線をうけいれよといっているのである。かれらは、もし「なにごとくも自分で計画をたて、意表をういて成功をねらい」、「下部」、つまりへ三家村への「りっぱな意見」をうけいれないなら、「結局いつかはひどい目にあう」と、党にむかって大それた警告をした。これは、資本主義復活の「計画」を党の路線にせよと

公然と要求し、党中央を悪どくののしつたものである。かれらの「りつばな意見」とは、修正主義を實行し、資本主義の復活をすすめ、全国の九〇パーセントをこえる人民をまたしても苦難と暗黒の被抑圧者の境地につき落とすというものである。これはもつとも悪質な案である。ちようど香りのよい花と毒草のばあいのように、革命的な人民とひとにぎりの反党・反社会主義分子は、「善」「悪」の区別ではつきり対立しており、共通のことはありえない。

わずか三日を経て、二月二五日には、また、「王道と霸道」という文章がまかり出た。マルクス主義の國家学説は、「王道」と「霸道」がともに地主階級の独裁であり、反革命の暴力であることを、われわれにおしえていく。うわべは「王道」のかたちをとる地主階級の支配も、中身はみな霸道であつて、「仁政」などというものは、血のしたたる反革命の暴力のペールにすぎない。魯迅がずばりと指摘しているように、「中国の王道は、みかけは霸道と対立するようでも、実際には兄弟であつて、その前とその後でかならず霸道が出てくるものである」(『魯迅全集』第六卷一〇ページ)。ところが、鄧拓はさかんに「王道」をもちあげて、「たとえ古代であつても、王道はやはり霸道よりはるかにました」などといつてゐる。これほどデタラメに地主階級の独裁をたたえあげたのは、なぜだろうか。それは、鄧拓のテッチあげた「経験と教訓」、つまり、「ひと目みただけでも、当時、覇者になろうとしたものがいたるところに敵をつくつて、いかに人心をえなかつたかということ、すぐにわかる」という「経験と教訓」を、「われわれ」にうけいれさせようとするにあつた。そのうえ、かれはとくに、「われわれの(つまりへ三家村への)ことば」に翻訳して、「霸道とは……鼻息があらくて、主観と独断のつよい、あくまで我を通す思想・作風のことだ」といつてゐる。この口調は、もうわれわれがいくども耳にした

ものではないだろうか。現代修正主義者は、世界制覇を夢みるアメリカ帝国主義を平和の天使ともちあげ、アメリカ帝国主義に断固反対する中国を「好戦的」、「霸権主義」と毒づいた。また、国内の反動階級は「三和一少」、つまり帝国主義、各国反動派、現代修正主義と「融和」して、各国人民の革命闘争への支援を少なくせよとさかんにふいちようし、われわれが「孤立」し、「いたるところに敵をつくつてゐる」と攻撃した。ちよつとひきくらべてみさえすれば、『燕山夜話』の「覇者になろうとする」とか、「いたるところに敵をつくる」とか、「人心をええない」とか、「我を通す」といふどぎつい攻撃が、ほかでもなくわれわれのプロレタリアト独裁の革命路線に向けられたもので、かれらは国内、国外の反動派の太鼓もちになつてゐることがはっきりとわかる。それは、『北京日報』の文章でのべてゐる「封建社会制度を美化」といふような問題には決してとどまらな

い。  
三月二九日には、『李三才を弁護する』という文章がまかり出た。まずもつて題目そのものがおかしい。いま、四〇〇年まえの李三才を攻撃しているものは一人もないのに、なぜ大声をあげて「李三才を弁護する」必要があるのだろうか。そのいうところによると、李三才は「肯定的な歴史上の人物」であり、「封建制の暗黒政治を攻撃した」大英雄だそうである。ところが、『明史』をしらべてみると、そうではない。かれは農民蜂起に血なまぐさい弾圧をくわえた人殺しであり、「あらゆる手口をつかつて、大盗賊をのこらずとらえ、みな殺しにした」のであり、その生涯は数々の犯行に血ぬられている。これは、ひたすら「封建制の暗黒政治」に奉仕した地主階級の手先であつて、いわゆる「禍乱」「巨盜」の徹底的な一掃と地主階級の天下の「永久的な維持」を一再ならず皇帝に上書している。こうした人物を「弁護」する真のねらいはどこにあるのだろうか。



もともと、李三才は内閣にわりこもうとしていた野心家である。当時、かれは地主階級の主流派と矛盾があったため、「反対派」の立場からたえず主流派を攻撃し、皇帝への上書のなかで「民のために訴える」というスロガンを出したりしたのだが、犬と犬のかみあう矛盾のなかで「官」を「免」ぜられたのであった。鄧拓がこの「退官させられた」「反対派」をもちあげて、かれを大英雄にデッチあげたのは、この死人にことよせて右翼日和見主義分子を「弁護」するためである。鄧拓は筆を「罷免」されたのちに集中し、「李三才がとうとうふるさとに帰ったあとでさえ、かれらはなお、『御料木を盗んで私宅を建てた』などの罪名を李三才にかぶせようとした」、そこで、「李三才はまた一再ならず上書した……だが、万曆の朝廷はこの事実を徹底的に調べあげる勇気がなかった」と書いてある。「この事実を徹底的に調べあげる勇気がなかった」というのは、あてこすりのためのデッチあげである。歴史には、若干人の官吏が「調査にでかけた」とはつきりしるされている。鄧拓は、これにかこつけて、当時すでに「官」を「免」ぜられていた右翼日和見主義分子を極力もちあげ、右翼日和見主義分子の犯罪的活動をひきつづき調べあげる革命的な人びとのたたかいをさまざまに、右翼日和見主義分子に対する原決定の取消しのために力をつくし、「罷免」された右翼日和見主義分子がふたたび「上書」して党に気がいがいじみた攻撃をくわえることを大いに支持したのにほかならない。

「李三才を弁護する」は公海瑞の免官の続編であり、「李三才」は罷免されたのちの「海青天」であるということ——「これはきわめて明白なことではないか」

へ三家村へが党中央、毛主席、総路線を直接に攻撃した資料はあまりに多くて、とてもかぞえきれない。公海瑞の免官が発表されたあと数回の上こしまな風のなかであらわれた一部の文章をみただけでも、へ三家村へ

内幕がどれほどおどろくべきものであったか、このひとにぎりの人間が党と社会主義事業にどれほどはげしい階級的なくしみをいだいていたか、また、かれらが右翼日和見主義すなわち修正主義者をどれほどあらゆる手をつくして持ちあげ、支持していたかがわかる。かれらは中国の色がかわり、赤い中国から黒い中国にかわるのを待ちのぞんでいた。この殺人宿は、資本主義復活の重要な巢窟であり、なかには毒蛇がひそんでいる。これを徹底的に洗いあげ、たたきつぶさなければならぬ。みなが立ちあがってへ三家村へをたたきつぶし、徹底的に革命をおしすすめること——これがわれわれの当面の戦闘的任務である。

すぎがあればもぐりこみ、

あらゆる手をつくして、

「平和的転化」をおしすすめる

露骨な反党・反人民・反社会主義の作品のほか、『燕山夜話』と『三家村ノート』には、いわゆる「學術」「考証」「休め」のかたちをとった一群の大毒草ももちまれている。それらは、「古今の有用な知識を味得する」ことを煙幕として、社会主義に全面的な攻撃をおこした。それらは、ただ一般的に「封建社会制度を美化し」、「死人をもちあげた」のではなく、現実的な政治的目的をもっていた。つまり、一方では、あの露骨に党と人民と社会主義に反対する黒い糸に歩調をあわせ、「歴史」「学問」「趣味」を煙幕として、人びとの革命的な警戒心をマヒさせ、より多くの読者をたぶらかし、その影響をひろめること、いま一方では、それら自身「な

まくら刀で首を切る」というやり方で、党と毛沢東同志が各領域で堅持するプロレタリア路線に全面的に反対し、地主階級とブルジョアジーの思想で革命的幹部と革命的人民を全面的にむしばみ、「平和的転化」をおしすすめることである。どんな人でもこの毒におかされて、それにとりつかれば、新しいブルジョア分子に変質するだろう。矢じりもあらわな毒矢と色さまざまな糖衣砲弾——これが三家村へのつかった二つの手口である。

鄧拓は、『燕山夜話』の最初の文章で、「生命の三分の一」を自分のものにするという看板をあげて、「みながこの三分の一の生命を大切に、一日の労働や仕事のあと、楽な気持ちで古今の有用な知識をいくらかでも味得されるよう注意したい」とのべた。「三分の一」というのは、おもてむきは「余暇」の時間をさしているが、もちろん、へ三家村へは決して「三分の一」をもとめるだけにとどまるものではなく、プロレタリアート独裁の全体をくつがえし、資本主義の復活を実現しようと考えていたのである。だが、「三分の一」は、他の「三分の二」を自分のものにする煙幕としてうつつけである。みなに「楽な気持ち」で『燕山夜話』をよませるのは、みなを革命的な警戒心をマヒさせるためであった。かれらは、革命的立場がすっかりしていないものの、「生命の三分の一」をむしばむことからはじめて、しまいはすべてをかれらの手でむしばみつくし、へ三家村へ一味がいつそう多くの手兵をあつめて「平和的転化」をおしすすめる組織的な力と社会的な基盤にしようと考えていたのである。

『燕山夜話』は、さかんに読者への回答というかたちを使った。鄧拓は、また、その文章のなかで、どのよう青年とあい、どのように「地方人」「同志」「友人」「子供」「編集者」「学生」「教員」……ないし各部門で「働く」実務人員から「示唆」や「提案」をうけ、またどのようにかれらの「質問」に答えたかについて、さ

かんに書きたてている。これを見ても、かれらの活動面の広さがわかる。反社会主義思想の宣伝は、幅のひろい活動とむすびついているのであって、一部のものを毒しては、それをだきこむのである。かれらは、「学問」を煙幕として、若者をへ三家村へ大殺人宿のグループのなかにさそい込もうとやっきになった。この点、ふたつの例をあげれば十分であろう。鄧拓は「人はまずしくても志はまずしくない」という文章のなかで、「先日、ある若い学生がわたしのところへやってきて」「明代の黄妃水がまとめた『貧士伝』を口語体に抄訳したいと、賛否の意見をまとめた」とのべている。『貧士伝』は、没落地主階級のもの伝記で、とくに地主階級のいわゆる「氣骨」を宣伝しており、いまの人民にはひじょうに大きな腐食作用をもつものである。この学生は、ブルジョア思想にひどくむしばまれていたが、それでもまだ心をきめかねていた。ところが、ひとたび自分の手にはいると、鄧拓はまるで宝物でも手に入れたかのように、かれの着想を「ひじょうに結構だ」とほめあげたばかりでなく、さっそく、政治的な理屈を山のようにならべ立て、「貧士伝』の翻訳を、地主階級にむかって「えりを正して敬意をしめし」、地主階級から「けたかい気節」を学ぶということにむすびつけ、さらに、これは一部のものか「将来、万が一にもある思いがけない苦境におちいった」ときの「手本」になるとほめかした。これは、あきらかに、人を井戸のなかにつき落とし、そのうえ石を投げこむようなやり方ではないだろうか。これは、この若者をこんにちの「貧士」、つまり反社会主義分子に奉仕させるものではないだろうか。このほか、「北京放送学院のある学生から手紙がきた」が、この「学生」もブルジョア思想に支配されて、あたまのなかには低級な趣味でいっぱいである。かれは「パスの中の」ある「女性の頭髪」がとても長いことにもつぱら関心を持ち、「こんなに長い頭髪はわれわれになにを示唆するかを話し」てほしいと鄧拓にもとめた。すると、鄧拓は、さっそく退廢の

典型ともいえる低俗な作品を書いて、この「学生」を支持したばかりでなく、歴代の皇帝のもっともただれ切った宮廷生活のなからさまざまな「美人」の「長い髪」をさがし出して、さかんに宣伝した。これは、そのようなブルジョア思想にむしばまれたものをいっそう腐敗墮落させ、新しいブルジョア分子にかえるやり方ではないだろうか。およそへ三家村に毒され、だきこまれたすべての若者は、立ちあがってかれらのこうした犯罪的なしわざを摘発すべきである。

この観点から、反動思想を宣伝したそれらの作品をよめば、その政治的なねらいはひじょうにはつきりする。かれらは、資本主義復活のために力を組織しようとして、さかんにブルジョアジーの反動的な教育路線をおしすすめた。かれらは、ブルジョアジーの人間性論を教育の土台にして、「『人間の本性は先天的に善である』という孟子の意見には基本的に賛成すべきだ」などといい、階級的観点で若い世代を分析し教育することに反対となえ、若者を毒するかれらの犯罪行為をおおいかくした。かれらはあろうことか「旧式の役者養成所のこのやり方は教育学の原理にかなっている」とふいちようし、「社会全体がこのやり方を全面的にとりいれ」、いわゆる「適材を適所におくこと」によって階級路線を解消し、地主階級とブルジョアジーの後継者を「計画的に」しどし育てることを要求した。かれらは、若者にむかって、「独学と家伝をむすびつける方法」とか、「刻苦勉強」によって「有名な学者」になるとか、「あらゆる資料を説破」して「基礎をつくる」とかということを極力提唱した……これはたんにブルジョア的な名声をあげ一家をなすという問題だけではない。かれらは、おもにこの方法で一群のものをむしばみ、だきこみ、一群のへ三家村に信者をかきあつめて、かれらの反共的言論の伝播者に仕立てあげ、一部の若者を資本主義復活のためのへ三家村の道具にかえようとしたのである。つまり、

「学者」「名士」をエサとしたのであって、その言葉はひじょうにあまいが、その心はきわめて悪らつである。

かれらは、資本主義復活のために精神面の条件をととのえようとして、ブルジョアジーの反動的な學術路線を固執した。かれらは、「多学少評」のスローガン、つまり、「なにごとについても、多く学び、少なく批判する」というスローガンを打ち出し、革命の旗じるしをあげるものは「あらさがしが好きで」「やたらに批判する」から「かならずひどい目にあう」と毒づいた。この「多学少評」とはどういうことだろうか。それは、自分たちが毛沢東思想をのしって地主階級とブルジョアジーの文化をもちあげることだけを許し、また、自分たちが「學術」を資本主義復活に奉仕させることだけを許し、われわれがブルジョアジーと地主階級の文化を批判することを許さず、すべての革命的な人びとがかれらを批判する権利をうばいあげることである。いいかえると、搾取階級の文化を全般的にうけいれ、これを聖旨としてあがめ、毛一本もふれてはいけないということである。プロレタリアートをたたき、ブルジョアジーをあと押しし、學術部門にたいする殺人宿の支配権をつよめて、へ三家村の毒草をもふくむすべての毒草がなんの妨げもなくどつとどつとび出してくるのを支持すること——これがかれらの反動的學術路線の核心である。

文學・芸術面でもおなじである。「多学少評」とおなじように、かれらは、いわゆる「一視同仁」のスローガン、つまり、「どんな演目も平等であって、現代物の演目でも伝統的な演目でも、われわれは一視同仁でなければならぬ」というスローガンをつくりあげた。階級社会では、どちらか一方が他方に勝つのみであって、超階級的な「平等」などはなく、プロレタリアートとブルジョアジーの「平等」などはまったく存在しない。プロレ

タリアートの革命的な現代物を支持するならば、かならず地主階級とブルジョアジーの時代物を批判しなければならぬ。また、「演劇の遺産」のなかに「こんにちの要求にまったくかなったよい芝居がある」と宣伝するならば、かならず革命的な現代物をたたき、おさえつけなければならぬ。「一視同仁」は、革命的な現代物を大いに支持するやり方をどれもみなたたく一方、多くの毒草をもちあげ、それらが批判をうけないようにかばい、これらの反党・反社会主義の活動に奉仕させる、という一石二鳥をねらったものである。

かれらは、社会関係の面から搾取階級の支配を復活させようとして、反動的な地主階級とブルジョアジーの道徳を固執した。かれらは、地主階級とブルジョアジーの「気骨」「高潔」「修養」「金もうけ」といったくさりばてた人生哲学を人びとにすすめ、反動哲学者朱熹からは「自制力」をまなび、張詩からは「労働をさげすむ」「反抗精神」をまなび、孔子からは「克己復礼」を学べといひ……地主階級の「封建的なあいさつ法」を復活させることさえ大いに宣伝した。これは、封建主義と資本主義のふるい中国に後退せよと、公然とわれわれに要求するものである。同志諸君、考えてもみてほしい。もしも、そんなことになれば、共産主義の新しい道徳、新しい気風はすつかり踏みじられてしまうではないか。われわれの社会は、封建的秩序を基準にした暗黒の世界に変わりはててしまおうではないか。搾取階級のものにあうと、「えりを正して敬意をしめす」というのでは、それこそ反革命の復活ではないか。広はん労働者、農民、兵士は、そうした「気骨」のある「君子」、つまり頑迷な搾取階級分子からまたしてもむごい抑圧をうけることになるではないか。

かれらは、地主階級のいとも孝行な子孫として、地主階級のために伝記をつくることを公然と要求した。こころみにつぎの鄧拓のことを読んでほしい——「以前、各地で地方誌をあむさいには、前例にしたがつていわゆ

る『郷土の賢才』の名簿をつくり、そのあとで資料をあつめ、それぞれの伝記をつくったものである。いま、もしわれわれが北京誌をあむとすれば、あきらかに宛平県ワンプینگの大小米ダイコウダイ（明代と清代の官僚であった米万鐘ミマンシュン、米漢雲ミハンウンのこと）にしかるべき地位をあたえる配慮をすべきである」と。「以前」とは封建時代と国民党反動派の時代のことであり、「前例にしたがつ」とは地主、顔役衆、とりわけ悪徳地主の「前例」に「したがう」ことである。また、「郷土の賢才」という歯のうくような贅辞をおくられたのは、すべて地主階級の頭株である。「いまわれわれ」にこれら「郷土の賢才」の伝記をつくれというのは、土地改革のち打倒された地主悪党とその祖先の位牌をふたたび持ち出し、広はん貧農、下層中農をまたしても「郷土の賢才」の奴隷にしようとするものにほかならない。これこそすべてを眼中におかないのさばりようではないか。主将の呼びかけにこたえて、『三家村ノト』はたびたびこの問題をもち出し、軍閥、官僚、地主、「反面人物」の伝記をつくれと要求した。これは、もつとも深い意味での復活活動である。これこそ、地主階級とブルジョアジーの政治資本をふやし、かれらがふたたび中国人民を支配するための条件をつくりだすものにはかならない。広はん労働者、農民、兵士は、こうした犯罪活動の実現を絶対に許しはしない。

以上に引用したのは、ごくわずかな一部の資料にすぎない。それでも、「学問」「知識」というかくれミノのもとで、各方面の宣伝が一点にじぼられて見えてとることができる。つまり、毛沢東思想に反対し、社会主義のすべてを否定して、幹部と青年を墮落、変質させ、資本主義の復活を全面的、徹底的に実現しようとはか

ることがそれである。毛沢東同志は、「プロレタリアートも自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとするし、ブルジョアジー

も自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとする」(「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」)とのべている。△三家村▽が興味しんしんとえがき出したすべての朽ちははてた反動的なものは、かれらの反動的な世界観のあらわれである。人びとはここに、△三家村▽の面々のくさりきった魂を見ぬくことができる。呉晗は、かつて「余暇の時間は第一の趣味がひろく羽をのばす自由の天地だ」という「名言」をはいたことがある。このことがあばき出しているように、かれらがふだん共産党員の上衣をまとって、会議をひらいたり、仕事をしたり、演説をしたり……しているのは、みな見せかけで、いやいやながらやっているのであり、「第一の趣味」ではない。かれらの本来の面目、つまり「第一の趣味」が思うぞんぶんに姿をあらわすのは、「余暇の時間」になって、△三家村▽にもどってからである。かれらは、反党・反社会主義活動の陰謀をめぐらすほか、飲み、食い、遊び、猫や犬を語り、地主を持ちあげ、骨董品をいじくりまわし、マージャンをうち、商売をやり、ソ連の修正主義的知識分子の流儀をならい、杜甫の「枕袴は餓死せず、儒冠多くは身を誤る」の詩をくるおしく吟じて「にがい気持ちを味わい」、ついに「美人」の「長い髪の奇跡」に「ヒント」をえて甘い思いにひたる……など、およそくさりはて、ただれきったことなら、なんでもやっつけてのける。これは二重人格の偽君子である。その一部が文章となって、人民をむしばみ、わが党をむしばむのに使われたのである。

「平和的転化」がどんなものかを知りたいなら、△三家村▽という生きた見本をみるがよい。かれらのこうした醜悪な言論、かれらの活動方式、かれらのやりとげたいと思っていたこと——これこそ最も確かな意味での「平和的転化」の実行である。このまことにおどろくべき反面の教員から、われわれは深刻な階級闘争の教訓をうることができる。

### 退却のさいの策略

一九六二年九月、党の第八期中央委員会第一〇回総会がひらかれた。この会議で、毛沢東同志は、階級闘争を絶対に忘れてはならないという偉大なよびかけを全党と全国人民にたいしておこなった。この会議は、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、復活をねらう資本主義勢力と封建勢力にたいして断固たたかう進軍ラップを高くかに吹き鳴らすとともに、また「この階級闘争は不可避的に党内に反映する」と指摘した。化けものどもは肝をつぶしておののき、はげしくゆさぶられた。△三家村▽は、形勢がかんばしくないと見てとると、退却をはじめた。まっ先に退却したのは主将である。一九六二年一〇月、鄧拓は、さつそく『燕山夜話』第五集の「読者に告ぐ」のなかで、「ちかごろは余暇の活動の注意力を他の方面に移しているので、『燕山夜話』はもう書かないことにした」とのべた。

『燕山夜話』の最後の文章は、九月二日に発表した「三十六計」である。「三十六計、逃ぐるにしかず」——これは遁走するという意思表示である。単行本にまとめるさい、やましい思いのある筆者は、「遁走」の痕跡をみつけれないよう、この文章を発表した順序どおりに末尾にはおかないで、中間に挿入するという手口をつかった。この文章は、「檀道濟が当時つかった計略は、たんに『逃ぐるにしかず』だけではない。もし他の計略がなければ、逃げようとしても逃げられなかつただろう。しかし、かれは陽動作戦や離間工作など、いくつかの計略をくみあわせて使った……それでやっと安全に逃がれることができたのだ」と、含みのあることをのべてい

る。党の第八期中央委員会第一〇回総会のあと、へ三家村は、ひきつづき攻撃をくわえるほか、革命的人民が反撃に出たとき「安全に逃がれ」られるように、たしかに「いくつかの計略をくみあわせる」手口をつかった。したがって、またすくなくならぬ「よい芝居」を打っている。かれらの「計略」をみてほしい。

一、『燕山夜話』第五集のなかで、「これまでの一時期、『夜話』を書いてきたのは、人に引っぱられて馬にのせられたからである。いま、馬からおりるのも、自分が自分になりたいとしても不満をもつのをさけるためである。将来たしかに、なにか体得があつてどうしても書かずにいられなくなつたとき、また筆をとつても遅くはない」と、いかにももつともらしく読者に「告げ」た。一方では、意識して攻撃したのではない、「馬にのつた」のも「馬からおりた」のも受身である、と言いわけしながら、いま一方では、「将来」ある時期に形勢が有利になれば、「また筆をとり」、また腕をふるう、とほのめかしているのである。

二、『三家村ノート』の陣地をひきつづき確保しておいて、一方では攻撃をつづけながら、他方では「石油をたたえる」といった、「毛沢東同志の『自力更生』の方針」に賛意をあらわすいくつかの文章を書いて退却を掩護した。

三、『燕山夜話』にこたえて各地ではじめた「新聞のエッセイのコラムがながくつづく」ようにはげまし、もつと多くの陣地を確保しようとした。

四、一九六三年から六四年にかけて廖沫沙の「有鬼無害論」への批判をくりひろげ、一九六四年七月には廖沫沙のことからへ三家村全体が暴露されるのをさけるため「三家村ノート」の看板をおろした。

五、廖沫沙を表にたててニセの自己批判をさせ、「この誤りをうんだ原因」は「ブルジョア世界観が自分の頭

のなかで」「まだ支配的地位をしめていた」ことにあり、「われわれの社会主義社会にもいまなお階級、階級矛盾、階級闘争が存在しているのを忘れていた」ことにある、などと言わせた。これはのちに呉晗が「自己批判」のなかでのべた言葉とほとんどそっくりであることに注意してほしい。かれはまた、自分は「ブルジョアシーと封建勢力が党と社会主義に気がいじみた攻撃をくわえるのに、無意識で助手の役をつとめた」とのべた。廖沫沙は孟超（モウシャウ）の「助手」にすぎないのだから、へ三家村を追及しないようになったのは当然であろう。なんとうまい計略ではないか。

六、へ海瑞の免官が批判されると、向陽生すなわち鄧拓はまた大急ぎでとび出してきて、「批判」の文章を書き、へ海瑞の免官の「指導的思想」「思想的基盤」は「封建支配階級の道徳を宣伝」するものであって、「史的観念論を宣伝」しているにすぎない、などとのべた。こうして、一方ではへ海瑞の免官の政治的目的と政治上の反動性をおおいかくして、呉晗に救命袋を投げてやり、討論を袋小路にひき入れようとたくらみながら、いま一方ではへ三家村などは存在しなかったといい、呉晗とは「決裂」するといった。そして最後に、「呉晗同志がなにか意見をもっているなら、ひきつづき文章を書き」「実際に即して分析と研究をすすめ」てもらいたいと、一筆のぞかせた。つぎに打つ手を呉晗にさしやうしたわけである。

七、呉晗は、すぐさまよびかけにこたえ、一再ならず文章を書いて向陽生に「感謝」の意をしめし、ひきつづき「自己批判」に名を借りて気がいじみた攻撃をおこない、おそれもなく大いに自分を持ちあげるとともに、廖沫沙の「自己批判」のなかの切札をもつてきて、「正しい思想が頭のなかでしっかりとした支配的な地位をしめていなかった」「ひと口にいって、わたしは階級闘争を忘れていた」といい、また、向陽生の「批判」を

つうじて「わたしは誤りを知った」とのべた。これで、どうやらごまかして逃げのびられそうである。

八、最後に、形勢ががんばしくないと見てとると、こんどはとつぜん、編集部の名で鄧拓を「批判」し、ありとあらゆるぬけがらの計略をつかつて、退却を掩護しようとした。

これほど多くの「計略」を「くみ合わせ」れば、「安全に退却」することができるだろうか。これほど多くの手口をつかつてみるとは、人を馬鹿にしたものである。だが、かれらは革命的人民の識別力をあまりにも低くみつもりすぎた。かれらはプロレタリアートの革命への決意をあまりにも低くみつもりすぎた。かれらはかくしおせるだろうか。かれらは遁走しおせるだろうか。党中央と毛沢東同志にみちびかれ、教育されている広はんな革命的人民は、反党・反社会主義の黒い糸を徹底的にとりのぞく決意をかためている。かれらは自分ではひじょうに利口なやり方だと思つてさまさまな計略をつかつたが、実際には馬鹿げたことをしてかして、ちようど自分しんをさらけだすことになったのである。かれらは、「共通の反動的政理想」をもっているだけでなく、共同の行動計画をもつており、ひとにぎりのものからなる反党・反人民・反社会主義の集団である。これはひじょうにはつきりしているではないか。

一九六二年三月にへ三家村への気がいじみた攻撃が高まったとき、鄧拓は、へ黒い白鳥という詩を書いて、『北京晩報』にのせたが、そのなかに「春の風は夢を吹き、湖の波は暖を送る、ひとり我のみ先に知る」という句がある。目先がきいて「先に知る」ことを、なんと得意げに誇つていたことだろう。だが、今回は、「先に知る」というのも、ききめがない。ほんとに先に知るのには、毛沢東思想を身につけた革命的人民だけである。どうだろう、いまへ三家村への内幕は広はんな人民によつてほしいにあばかれつつあるではないか。

### へ三家村を根だやしにしてへ三家村の ばらまいた毒を完全に一掃しよう

人びとはたずねないわけにはいかない。へ三家村が連続数年にわたつてこれほどまでに凶暴な、悪どい、野放図な反党・反社会主義の活動をつづけることができた原因はどこにあるのか。「プロレタリアートの政治による統率を実行しなかつた」だけのことだろうか。「プロレタリアートの政治による統率」でなかつたとすると、なによつて統率していたのだろうか。

へ海瑞の免官が批判されてから、人びとは、この芝居の反動的な本質をあばき、右翼日和見主義分子を擁護するその政治的な目的をあばき、また呉晗の反共・反人民・反革命のみにくい歴史をあばき出してきた。だが、へ三家村へ全体の活動からへ海瑞の免官をみ、この数年間のはげしい階級闘争のなかでへ三家村へ全体のはたした役割をはつきりさせるのでなければ、その最も深い根をぬきとり、このひとむらの大毒草を根こそぎにし、この大殺人宿をたたきこわすことはできない。

毛沢東同志は、「すべて反動的なものは、たおさないかぎり、たおれはしない」（「抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針」）とのべている。へ海瑞の免官にたいする批判が始まつてから、へ三家村へ一味の一步ごとに陣地を固め、戦いながら退くという策略は、この普遍的真理をまたしても立証した。反動的な階級とその代表の人物は、みづからすすんで歴史の舞台を引きさがることは決してしない。プロレタリアートが例の「雑家」の

手もとからしだいに陣地をうばいかえすには、広はんな労働者、農民、兵士が立ちあがって、一步一步きびしいたたかいをすすめる以外にないのである。

へ三家村∨一味の触角は多くの部門にのぼしている。「燕山夜話」は全国に悪影響をばらまいた。「燕山夜話」は「知識」と「美文」を看板にしていたから、政治的な判断力に欠けた一部の人びとを引きつけることができ、報道、教育、文学・芸術、学術界に賞賛者と追隨者がすくなくなかった。鄧拓じしんも、「多くの文章で提起した観点と論証は、友人たちの賛同をうけた」、「遠方の読者からの手紙がしだいにふえてきた」、「他の地方のいくつかの新聞も、読者の要望にこたえ、おなじ形式をとって、コラムで知識のためのエッセイを発表するようになった」とふいちようしている。「燕山夜話」のいくつかの論点にたいしては、これに「呼応」した一群の文章もあらわれている。一九六一年九月九日、「北京晩報」は、大きな活字をつかって『燕山夜話』の出版をさかんに広告し、「筆者は当面のいくつかの問題をとらえており」、「思想性にとみ、知識をゆたかにする」とふいちようして、あらゆる手をつくして人民のあいだに『燕山夜話』の有害な作用をひろめた。腐食の程度はまことに大きく、毒をばらまいた範囲はまことに広い。それらの悪影響を一掃するには、広はんな労働者、農民、兵士大衆が立ちあがって、各方面から『燕山夜話』と『三家村ノット』の害毒を洗いざらいあばきだし、いつそうつつこんだ批判をくわえなければならぬ。

へ海瑞の免官∨の批判からへ三家村∨の批判にいたるたたかいは、人の心をゆりうごかす階級闘争である。これは、政治、思想、文化の領域における大革命である。このなみなならぬ戦闘任務をまえにして、われわれは敢然と革命をおすすめしなければならぬ。

毛沢東同志は、「『八つどきにされるのも恐れないなら、あえて皇帝を馬からひきおろす』——われわれは、社会主義、共産主義のためにたたかうさい、こうしたなにももおそれない精神をもたなければならぬ」(「中国共産党全国宣伝活動会議における講話」)とわれわれをばげましている。いまのわれわれには、共産主義の事業から出発したこのような原則的精神と批判的精神の発揚がいかに必要なことであろう。毛沢東思想に反対するもの、社会主義革命の前進をはばむもの、中国と世界の革命的人民の利益に敵対するもの——そうしたものは、「大家」であろうと、「権威者」であろうと、三家村あるいは四家村であろうと、またどれほど有名で、どれほど地位があり、どんな人にさしずされ、どんな人に支持され、どれほど多くのものから持ちあげられていても、それをすべてあばき出し、批判し、踏みたおさなければならぬ。原則問題では、西風が東風を圧倒するのでなければ、東風が西風を圧倒するのである。社会主義革命のため、毛沢東思想をまもるため、共産主義の事業のために、敢然と考え、敢然と言ひ、敢然とつきすすみ、敢然とやつてのけ、敢然と革命をおすすめようではないか。

「金猴千鈞の棒をふるい起こせば、玉宇万里の埃を澄清むべし」ともうたわれている。へ三家村∨がたとえどれほど汚塵をばらまいたとしても、手に手に毛沢東思想のへ千鈞の棒∨をにぎった幾千幾百万の労働者、農民、兵士が奮起してたたかえば、必ずそれらを徹底的に掃ききよめることができるだろう。毛沢東思想のさんらんだる光は、暗黒のすみずみまで照りとおして、すべての妖怪変化の正体をのこらず明るみに出すことであろう。

(本文は一九六六年五月二〇日上海の『解放日報』と『文匯報』に発表されたものである)



中国の社会主義文化大革命（第一集）

---

1966年 初版発行

定価 60 円

出版者 外 文 出 版 社

（北京阜成門外百万莊）

発行者 中 国 国 際 書 店

（北京 P.O.Box 399）

---

編号: (日) 3050-1448

3-J-713P  
00044

